

# 持続可能な社会と多様性

—エコ都市ワイタケレ（ニュージーランド）におけるマオリ—

## Sustainable Society and Social Diversity

— A Study on Maori Community in an Eco-City, Waitakere in New Zealand —

杉原利治

Toshiharu Sugihara

### Abstract

In spite of the widespread concern on the sustainable society, little research work has been done in the discourses of the concept of sustainability. I have investigated the partnership of Maori or their community with the council in Waitakere city, New Zealand in connection with the strategy of the city towards the sustainable eco-city and the self-determination of Maori community by applying the socio-organic systems theory on sustainability. I have clarified that the social diversity is in favor of the special relationship between Maori and the council because the environmental concept of Maori people is holistic and the council has kept the policy to respect the ethnic diversity. It should be noted that besides the relationship self-determining activities such as Maori providers or educational systems of their own have contributed to the autonomy of Maori, and hence to the sustainability of Maori community by strengthening their community and restoring their identity as Maori.

Key words: 持続可能な社会 sustainable society, マオリ Maori, エコ都市 eco-city,  
ワイタケレ市 Waitakere city, ニュージーランド New Zealand, 多様性 diversity

### 1. はじめに

資源・環境問題など、現代社会が抱える諸課題が、リオサミットを契機として、持続可能な社会という文脈で盛んに語られるようになった。それは、政府、自治体、NGOなど諸機関、団体から、個人にいたるすべての社会組織レベルを貫通する時代のモードとなるに至ったのである。

しかしながら、このような状況は、持続可能な社会を展望しようとする試みにとって、必ずしも好ましいとは言えないだろう。なぜなら、持続可能性の大合唱は、マスヒステリアをうみだす危険性を孕んでいるだけでなく、持続可能な社会の存在そのものを所与のものとし、さらにそれを目標とすることによって、「持続可能性」の本質をヴェールで覆ってしまいがちになるからである。同様の危惧を、筆者は、環境問題、特に環境教育について指摘してきた<sup>1)</sup>。

一方、近年の資源・環境問題の深刻化とともに、近代消費文明への反省から、先住民の智恵やライフスタイルに学ぶべきだとする論考は多い<sup>2) 3)</sup>。しかしながら、それらはたぶんに比喩的な言い回しであったり、形式的な言及にすぎないことが多い。また、先住民の技術や自然観への安易な依存や礼賛に対しては、文化人類学からの批判もある<sup>4-6)</sup>。

したがって、リオサミットにおいて持続可能な開発が宣言されて以来10年以上経つにもかかわらず、

持続可能な社会とは何か、「持続可能性」とは何かについての理論的研究、本質的研究は極めて少ないのが現状である<sup>7)</sup>。

一方、我々は、人間社会システム理論に立脚して、社会システムが持続する三つの要件を導き出した<sup>8-10)</sup>。それは、社会システムの「代謝」、社会システム間の「関係性」、社会システムの「自律」である。社会システムの持続性は、現象的には、ある社会システムの「代謝」の持続性として観察される。しかし、社会システムは、単独では、代謝を長期間続けることはできない。それが可能であるためには、他の多くの社会システムとの間に関係性が成り立ち、維持されていることが必要である。さらにまた、ある社会システムは、外界からの摂動や内部的に生じる矛盾に対して、システムを修正することにより、あるいは、あらたな機能をもうけることにより、小さな変化に恒常的に適応し、大きな変動にも対応する機能をそなえることができる。

この理論に基づき、我々は、現代消費文化を代表するアメリカにおいて、200年来、非近代的ライフスタイルを維持し続けてきたアーミッシュ社会の分析を行ってきた<sup>11-15)</sup>。そして、彼らの社会がどのようにして持続可能なものになっているか、そのメカニズムを、彼らの特異な情報活動に焦点をあて、解明した。彼らは、情報を自己管理することにより、物財の消費のコントロールをおこない、特異なライフスタイルを持続させ、社会が持続可能であるための三要素、「代謝」、「関係性」、「自律」を満足してきたのである<sup>16)</sup>。

本研究は、ニュージーランド、ワイタケレ市におけるマオリに焦点をあて、社会の多様性が持続可能性とどのような関係にあるかを探ろうとするものである。中世ヨーロッパで、宗教的迫害を受け、近代社会の中で、自ら非近代を生きる道を選び、実践してきたアーミッシュとは異なり、マオリは先住民の中では例外的に、西欧式近代社会に適応したと言われている。実際、ニュージーランドの政治、経済、文化、スポーツ・芸能において活躍しているマオリも多い。しかし、事はそう単純ではない。多くの先住民がそうであったように、マオリもまた、侵略と植民地化の波を受け、衰退した。だが、イギリスとマオリとの間で結ばれたワイタンギ条約<sup>17, 18)</sup>、マオリの気質、ニュージーランドの政治経済的、社会的風土など様々な要因によって、マオリ人口の回復、増加とともに、彼らはニュージーランド社会の中で一定の位置をしめるに至ったのである。

西欧式社会への適応は、しかし、他方では、マオリの文化や伝統など、彼らのアイデンティティを希薄化させ、喪失させてきた。このような中、失われたものの回復とマオリの精神にのっとった、マオリによる、マオリのための様々な試みが興ってきた<sup>19-21)</sup>。

このような中で、1990年代初頭から、ワイタケレ市は、協同と参加を基本姿勢として、持続可能なエコ都市づくりをおこなってきた。これは、マオリと持続可能性をめぐる社会的実験ともみなすことができる。1960年代から30年間にわたってマオリの内側に醸成されてきたものと、多様な人々が共同で街づくりをおこなおうというワイタケレ市の自治精神とが、協同と参加による持続可能な街づくりのなかでみごとにマッチし、ダイナミックに展開してきたのである。

本論文は、ワイタケレ市とマオリ・コミュニティとのパートナーシップがどのようなものであり、マオリと環境の関係はエコ都市づくりにどのように寄与しているか、そして、マオリにとってコミュニティはどのような意味をもつかについて検証する。最後に、ワイタケレ市におけるマオリ・コミュニティを人間社会システム論的に考察し、持続可能な社会における多様性の意味を考察する。

## 2. ワイタケレ市の概要とマオリ<sup>22)</sup>

ワイタケレ市は、人口規模ではニュージーランド五位の都市であり、大都市オークランドの西側に位置している(図1)。ニュージーランド北島の北東部、オークランド国際空港からは30分ほどの距離にある。西はワイタケレ・レンジと呼ばれる原野・田園地帯と大西洋に、南と東は、マヌカウ湾とワイテマタ湾に面している。市街地、田園地帯、原生林がほぼ3分の一ずつを占めており、原野(風致

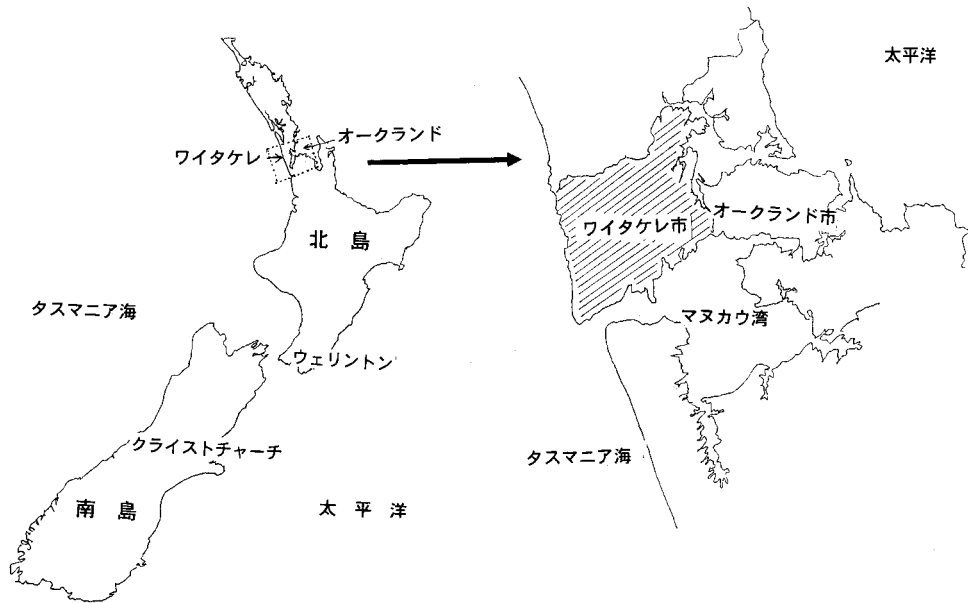


図1. ワイタケレ市

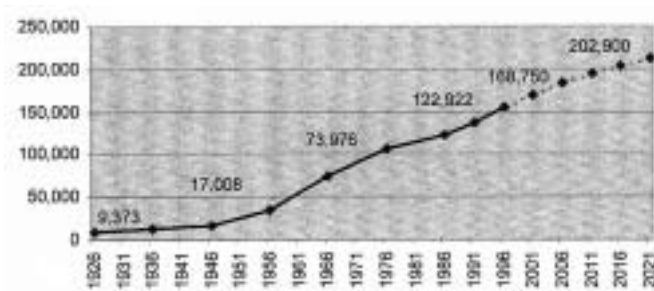


図2. ワイタケレ市人口の推移<sup>22)</sup>

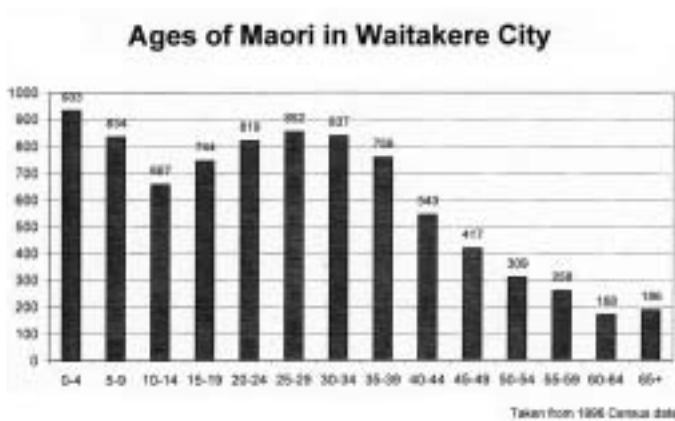


図3. ワイタケレ市マオリの年齢構成<sup>22)</sup>

地区) とワイタケレ・レンジを合わせた土地は、市の面積 (139134ヘクタール) の4割以上にのぼる。

ワイタケレ市の人口は、168750人 (2001年度) である。71.9%はヨーロッパ人の子孫と言われ、38%が非ヨーロッパ系である。市人口に占めるマオリの割合は13.4%であり、全国平均 (14.7%) よりわずかに低い。その他、太平洋諸島民 (15%) やアジア系住民が多いのが特徴的である。ワイタケレ市の人口は、第二次世界大戦後に急増した (図2)。これは、1950年代の北西高速道路の開通と政府の住宅政策によるところが大きい。大都市オークランドへの通勤が容易になったのである。現在、勤労者の半数は、オークランドで働いており、ワイタケレ市は、オークランドのベッドタウンの様相を呈している。人口の急増は、1960年代に太平洋諸島からの、1980年代はアジアからの移民による。最近では、高い出生率が人口の増加

の主な要因となっている。ワイタケレ市は、ニュージーランドでもっとも人口増加率の高い地域のひとつである。人口増加は、1980年の半ばから年2%であり、1956年からの人口増加率は500%である。このようにして、ワイタケレ市は民族的多様性に富んだ若い世代の都市となったのである。

特に、マオリの年齢構成は、若年層にシフトしている (図3)。20歳以下が人口の三分の一、24歳

以下が全体の4割を占める。マオリ、非マオリを年齢構成率で比較してみると、5歳以下がそれぞれ、14%、9%、15-24歳が、14%、8%である。一方、65歳以上の高齢者は、2%、8%であり、マオリ、非マオリで逆転している。

ワイタケレ市のマオリの生活は、ニュージーランド・マオリの平均より、教育、雇用、住居関係において優っている。しかし、健康・安全の面では平均以下である。特に、乳幼児、子どもの死亡率が高い。乳幼児死亡率は、マオリ全国平均1.12%、ワイタケレ市マオリは1.48%である。一方、ワイタケレ市のヨーロッパ系住民の場合は0.5%である。

ニュージーランドの地方自治体は、行政のなかで、市民にもっとも近くに位置している。また、日本と異なり、地方自治の独立性は高く、中央政府と地方自治体との関係は並立的である。ワイタケレ市の行政機構は、市議会、市行政府とから成っているが、市議会が中心的な役割を担っている。ワイタケレ市議会は、1989年の地方自治法のもとで設立された15の市議会のひとつである。市議会メンバーは、選挙によって選ばれた41人で、議員は12人、残りはコミュニティ代議員と市長である。これらの人々が、市行政と市民とをつないでいる。なかでも、議員の役割は非常に重要である。彼らが、市の活動と予算を立案する。すなわち、ワイタケレ市の政策の根幹を決定する。さらに、市行政の実務を担う市政長官を任命する。市政長官は、600人ほどの市スタッフをそろえて、広範な市政サービスを行う。実際、筆者(杉原)が会談した何人かの議員は、いずれも見識が高く、強い熱意と使命感をもって、市のために(国際的見地からも)自分が寄与できることを懸命に求めているように思われた。一方、コミュニティ代議員は、地域の代弁者であり、議会活動の中でコミュニティに関係する事柄を検討する。また、地元の道路工事、交通、水道、ゴミ、排水路、公園、レクリエーション施設などについて、議会の活動全体を監視する。

このように、議会、そして議員が、ワイタケレ市の在り方に非常に重要な位置を占めているので、本論におけるワイタケレ市、あるいは市の語句は、市議会を表していることが多い。

### 3. エコ都市ワイタケレの街づくり

1992年2月、ワイタケレ市議会は、骨太の新政策を決定した。エコ都市である。以後、ワイタケレ市は、持続可能性、ダイナミズム、公正の三つの目標をかかげ、エコ都市の実現をめざし、街づくりを行っている。その精神と哲学は、市長ボブ・ハーベイの演説『持続可能な街づくりに向けて』(資料1)<sup>23)</sup>にみごとに表現されている。これは、1999年、ハワイ、ホノルルにおいて行われた、アジア太平洋市長環境サミットにおけるスピーチである。

上述のように、ニュージーランドの地方自治は、日本とはかなり異なり、政策の立案、決定、執行に、首長が大きく関与したり、責任を負ったりすることはない。市行政は、議会(議員)と市政長官が中心になって担う。したがって、市長は、市行政の象徴的存在という色合いが濃い。それだけに、市長ボブ・ハーベイの演説は、現在、ワイタケレ市が行っていること、そしてさらに、21世紀に大きく展開しようとしている政策の哲学、理念とそれを実現するための道筋を、的確に表現しているといえよう。

「1992年以来のわれわれの政治ビジョンは、都市を、社会的、経済的、環境的に大きく変化させることです。これは、政治レベルでは、大胆さと明快さを意味します。コミュニティレベルでは、参加を意味しています。完全な参加です。」

「持続可能なコミュニティを築くための責任と能力は、明らかに地域のコミュニティそのものにあります。消費者、投資家、ビジネス界は、毎日、何千という意思決定を行っていますが、それらを利用することによって、自治体は、非常に重要なコーディネーターの役割を演じることが可能となるのです。」

このように、ワイタケレ市の街づくりの根幹は、住民、コミュニティの参加である。市と住民との



強力なパートナーシップによって、着実に包括的な住民参加がなされ、それが、持続可能なエコ都市をつくり上げると考えているのである。その際、市はコーディネーターに徹し、市民参加を促す触媒となるのである。

エコ都市を実現する一歩として、1993年、ワイタケレ市は、市のアジェンダ21をまとめ、持続可能なエコ都市についての目標と計画を策定した。アジェンダ21は、もともと、1992年、ブラジルで行われた地球サミットにおいて、環境破壊と社会的な不正をグローバルな見地から解決しようと策定された、21世紀に向けた議定書である。そのポイントは、①未来へのビジョンの提供、②人々、経済、環境の相互関係を意識した、持続可能な開発に向けたホリスティックなアプローチ、③現世代の行動を考慮した、次世代に対する長期的な展望、④行動の結果が不明な場合の予防措置、⑤意思決定時における経済、社会開発、環境保護、参加などへのコミュニティの積極的関与、⑥社会の様々なセクター間の協同である。

アジェンダ21は、グローバルな観点から策定されたものではあるが、コミュニティレベルでの実行を強調している。そして、それを担うのが、地方自治体である。ワイタケレ市は、1993年、ニュージーランドで最初にエコ都市宣言を行い、市の現在、そして未来を、エコ都市のビジョンで描いている。新しい世紀の知識と技術を駆使しながら、環境を第一義的に考えた都市づくりと市民生活の福祉増進を行おうとしているのである。人々のニーズ、産業界のニーズ、そして、環境からの要請、これら三者間のバランスをとりながら、持続可能な未来にふさわしい、質の高い生活を人々に提供しようとしている。換言すれば、社会的な豊かさと良い環境、そして経済発展を、同時に実現するよう努めているのである。

ワイタケレ市は、1993年のエコ都市宣言に引き続き、同年、「戦略計画—市の将来：戦略方向」、そしてさらに、翌1994年、「緑の青写真」<sup>24)</sup>を策定した。

「緑の青写真」は、ワイタケレ市がエコ都市として成長するための基本構想をまとめたものであり、ワイタケレ市のアジェンダ21をさらに具体化した計画書である。これは、市の環境政策の意思決定に対する基本総合構想であり、主要な7つの観点からなっている。

- ①コミュニティの強化
- ②市街地の整備
- ③市民参加の促進
- ④健康と安全についてのホリスティック（全体論的）アプローチ
- ⑤交通の減量とコミュニティ内のクリーンな移動手段
- ⑥エネルギー、資源、廃棄物に対するライフサイクル論的アプローチ
- ⑦経済的基盤の強化

「緑の青写真」には、ホリスティック（全体論的）アプローチやライフサイクル論的アプローチなど、現代の環境問題を解決する場合の重要なキーワードが含まれている。なかでも注目されるのは、①コミュニティの強化と③市民参加の促進である。特に、エコ都市ワイタケレを実現するために、コミュニティや人々とのパートナーシップを重視していることが注目されよう。市と人々、コミュニティとの協同作業によって、子供たち、高齢者をふくめたすべての市民が、社会的に、経済的に、そして、環境的に、より快適な成果を生み出すのである。

その内容は、以下の通りである。

- 1) 地方経済を強固なものにする。
- 2) 良い道路と便利な公共交通手段を備えた、魅力的なタウンセンターを造る。
- 3) ワイタケレ・レンジから海岸まで、小川や湖沼を連結した「緑のネットワーク」を守り、さらに延ばす。
- 4) 資源を賢く使用し、廃棄物を減らす。

#### 5) 住民の福祉を増進する。

エコ都市は、具体的には、以下のことによって成し遂げられるとワイタケレ市は考えている。

①包装を簡素化し、リサイクルをすすめ、廃棄物を減らす。②芸術、文化、レジャー活動を楽しむ。③水を大切にす。④エネルギー効率の良い住宅を建設する。⑤地元で働き、地元の生産物を買う。⑥車の使用を減らす。⑦相互扶助のコミュニティに暮らす。⑧汚染を減らし、資源消費の少ない新技術の開発を行う。⑨木を植え、水路を清掃して、自然環境を良くする。⑩情報を積極的に活用し、環境と歴史遺産について学び、理解を深める。

エコ都市の方向を採用して以降、ワイタケレ市には、いくつかの重要な変化が表れた<sup>25)</sup>。

1997年から2000年の間に、地元の仕事は、毎年、平均3%増加した。家屋の新築は、その95%が市街区域内でなされ、稀少な自然地域ワイタケレ・レンジの細分割を回避することができた。市は毎年、8万本の在来植物を植えた。1998/1999年から毎年、ゴミの30%減量化に成功した。この中には、家庭ゴミ、不法廃棄物、無機廃棄物が含まれている。かつて、ニュージーランドで最悪であった道路の安全性は改善され、自転車や若い歩行者を含め、ワイタケレ市は、1998年以来、最も安全な都市になった。

ワイタケレ市は、現在、「緑の青写真」にえがかれた理念と方法を基本にして、持続可能な環境都市をめざし、市民の日常生活、産業界、行政、各レベルで、活発な展開を行っている。

その中のひとつに、「緑のネットワーク」構想<sup>26)</sup>がある。

「緑のネットワーク」は、ワイタケレ市の貴重な資産、自然環境を守るために策定された環境計画である。河川、公園、そして、林と森の小径が、ワイタケレ・レンジ、田園地帯、市街地、海岸を結ぶのである。

緑のネットワークは、次のように構成されている。

1. 現存するブッシュ、小川、土手、海岸線など自然地域。
2. 計画された小径および保存地域（コミュニティのグループ、土地所有者、ワイタケレ市による共同作業）。
3. 土地所有者が植採する庭（できる限り在来植物を植えて、野生が損なわれないようにする）。

この事業は、ニュージーランド環境省の持続可能な管理資金を得て行われた。したがって、国全体のなかで、資源の持続可能な利用と管理に関する自治体のモデルとして注目されている。

さらに、市が行っている事業としては、エコ病院、エコ住宅、ニューリン・コミュニティセンター、マッセイ・レジャーセンター／図書館などの建築における様々な環境配慮、市民への環境啓発活動などがある。

ワイタケレ病院は、内外の専門家、市職員、そして、コミュニティが共同チームを組み、環境をまもりながら、市民の健康と社会的、経済的ニーズを満たすよう計画、立案された。

さらに、ワイタケレ市は、環境に優しい住宅がどのようなものであるかを、市民や産業界に示すために、1998年、(株)ワイタケレ資産が中心となって、モデル住宅を建築し、公開し、そして売却した。注目すべきは、市主導で、商業的に事業が展開されたことである。これによって、市場もそのような住宅を建築、販売することになったのである。

このように、ワイタケレ市が行っている施策、事業は多いが、重要なのは、市側が全面主体となるのではなく、必ず、コミュニティや地域住民の参加を念頭において計画をすすめていることである。ワイタケレ市は、市のアジェンダ21の実現に責任をおっており、市内、市外の様々な団体を援助し、参加を促しながら、様々なセクターと協同で政策実行をすすめている。

#### 4. パートナーシップとテ・タウマタ・ルナンガ

ワイタケレ市が、持続可能なエコ都市づくりのためにむすんでいる様々なパートナーシップのうち

でも、やはりマオリとの関係が主要なものである。実際、ニュージーランドにおいて、20世紀後半に相次いで施行された画期的な2つの法律、地方自治法と資源管理法では、地方自治体に、ワイタケレ条約の尊重とマオリ部族（イウイ）、準部族（ハプ）の権利保障を求めている。ワイタケレ市は、大地の民、マオリのイウイやハプとパートナーシップを結び、領地の守護の責にあるマオリとその文化、そして聖なる地を尊重し、保護するために様々な協同作業を行っている。ワイタケレ市においては、テ・カウエラウ・ア・マキとンガティ・ホアトゥアの2つが主要なイウイである。しかし、市は、他のイウイに属するマオリやイウイに所属しないマオリについても、その権利は守られねばならないと考えている。そのためには、協同の意思決定、明確で、オープンなコミュニケーション、そして、マオリとの協議が必要である。

この目的を達成するために、市は、まず、テ・カウエラウ・ア・マキとンガティ・ホアトゥアに対して環境管理官を配置した。

次に市は、1991年、「テ・タウマタ・ルナンガ」<sup>27)</sup> という組織を、マオリ・コミュニティと協同で設立した。マオリ語で「熟視する委員会」を意味する「テ・タウマタ・ルナンガ」は、選挙されたメンバーによるものではないし、2つの主要イウイ、テ・カウエラウ・ア・マキとンガティ・ホアトゥアの利益を優先するものでもない。マオリに関するあらゆる事柄を議論する場である。と同時に、ワイタケレ市議会とのコミュニケーション・チャンネルの役割も担う。つまり、市に対して、見解を述べ、アドバイスを言い、方向性と大綱を示すことによって、マオリ・コミュニティの意見を行政に反映させ、コミュニティを活性化させるのである。

「テ・タウマタ・ルナンガ」は、1992年12月には、市の常置委員会となり、ほぼ毎月開催され、市に報告書を提出している。メンバーは14人で、その中には、テ・カウエラウ・ア・マキとンガティ・ホアトゥアなど10のマオリグループ代表が含まれている。この委員会は、マオリの価値観を市の意思決定に反映させることが目的であり、その活動分野は以下の通りである。ワイタケレ市に対しては、①大地の民としてのマオリの責務に応え、②マオリ・コミュニティにおける各種サービスの提供に、マオリの要請を考慮し、③大地の民および地元マオリの重要関心事に気づき、常に敏感である、よう求める。また、④マオリ、市、各種委員会間のコミュニケーションを調整し、⑤マオリにとって文化的に重要な意味をもつ市の意思決定に対して、情報、資料を提供する機構をつくる、ことも重要な活動である。

このように、自治体とマオリ住民、イウイとの間において、実際的で、活発なパートナーシップが実現し、実績を積んでいるのである。「テ・タウマタ・ルナンガ」は、自治体とコミュニティの協力関係のモデルとしてニュージーランド国内のリーダー的存在であり、大きな注目を集めている。

「テ・タウマタ・ルナンガ」は、次の事柄に焦点をおいている。①市内のマオリに関する政策にあたって、市へ明確なアドバイスをする。②ワイタケレ市の未来についてのビジョン作成に参加する。③年計画、長期計画について経費に優先順位をつける。④マオリ・コミュニティやマオリ団体と市との協議方法をアドバイスする。⑤マオリ・コミュニティに対する市の協議、政策、対応の進展を監視する。⑥マオリ住民や団体が、問題を取り上げ、サポートを求められる場所を提供する。

「テ・タウマタ・ルナンガ」は、毎月1回、会合をもち、マオリの価値に関したあらゆる事柄を議論している。中でも、教育にもっとも力点を置いている。学校教育から成人教育、生涯教育にとどまらず、ユニセフの「子ども最優先」を実現するための方法の検討など、子供たちの成長、発達に対して、プラクティカルな議論を多面的に行っている。なぜなら、マオリは、子どもたちこそが、彼らの伝統と文化を担い、次の世代へ橋渡しをしてくれる存在だと信じているからだ。

また、市議会は、市行政府の中に、マオリ室をもうけ、マオリの意見と利益を、強力に、市政に反映させている。マオリ室は、マオリに関するあらゆる事柄を扱っている。特に、ワイタケレ市とマオリとのパートナーシップは、マオリ室の存在を抜きにしては考えられない。マオリ室は、マオリと市

の間の実際的な橋渡しに対して極めて重要な役割を果たしているのである。

ワイタケレ市のパートナーシップは、もちろん、マオリにとどまるものではない。マオリ以外の様々なグループ、団体とも緊密なパートナーシップを確立している。学校関係の団体、実業界、民族／文化団体、スポーツ倶楽部、納税者団体、福祉団体などである。太平洋諸島諮問委員会、企業委員会などの公式の委員会もあれば、健康プロジェクトのような課題ごとのパートナーシップ、さらには、対話と協議の過程で一時的にもうけられるパートナーシップもある。

ワイタケレ市は、基本的に、非常に幅広い多様性をもった個人の集合体である。したがって、市は、イウイやその他各種グループが、必ずしも、すべての市民を代弁しているとは考えていない。市は、個々の市民も、グループや団体と同様に意見を述べ、それを市側が聞けるような、開かれた手続きも用意している。

## 5. マオリと環境

マオリと環境との関係を考える場合、彼らの価値観、世界観を抜きにすることはできない。マオリがえがく豊かな世界は、断片的なものではなく、極めてホリスティックであるからだ。それは、次の5つの豊かさが総合されたものと考えられている<sup>28)</sup>。精神的豊かさ(テ・タハウィルア)、情緒的豊かさ(テ・タハンガカウ)、知的豊かさ(テ・タハヒネンガロ)、物質的豊かさ(テ・タハティナナ)、関係性の豊かさ(テ・タハファナウ)である。

したがって、マオリにとって、環境との関係もまた、部分的なものではなく、人間が環境ともちうる関係総体が問題となるのである。マオリは、伝統的に、環境と深い関わりをもってきた。それは、物理的自然環境だけでなく、精神的なつながりをも含んでいる。すなわち、岩石、植物、昆虫、鳥、動物、さらに、水、大地、そして、人々をも含めたあらゆる自然資源は、生命力によってお互いに結ばれていると考えるのである。この生命力は、マオリ語で、マウリとよばれる。もし、このマウリが傷つけられることがあった場合、その影響は環境全体(人々自身も含まれる)に及ぶと考えられている。

たとえば、不用意にゴミを捨てれば、小川は物理的に汚れる。それは、生命体としての小川や植物に悪影響を及ぼすだけでなく、自然界の物理的、精神的バランス全体を崩し、生命力マウリを損なうのである。小川を楽しむ人にとってみれば、汚染によって、物理的、精神的な悪影響をこうむることになる。健全な流れは、環境を構成するすべての要素が良好な生命力を維持するのに役立っているのだ。

マオリの世界観によれば、人々の物理的、精神的な幸福のあらゆる側面において環境の保護は重要であり、人間の生存もそのような環境保護がなされてはじめて成り立つと考えられている。つまり、マオリは、先進国の環境保護において近年注目されるようになった環境権に近い概念を、本来、有していたのである。

このようなマオリの自然観、宇宙観は、もちろん、個々のマオリが、祖先から引き継ぎ、維持してきたものである。が、マオリ社会の中で、環境との関係に責任をもち、関係を維持してきたのは、血縁に由来する部族集団、イウイである。イウイは、大地の守護者として、彼らの土地と環境、そしてマウリを守り、維持してきた。イウイには、それらを守る責務があるとされてきたのである。テ・カウエラウ・ア・マキとンガティ・ホアトゥアという2つのイウイは、ワイタケレ市の大半を占める彼らの土地の環境を守る責務を負っている。もちろん、物理的環境の保護と環境のもつ精神性の保護、両方である。

マオリはこのようにホリスティックな環境観をもっていたが、西欧への同化がすすむにつれ、彼らの伝統的生活様式とそれを支える精神は変質してきた。マオリがヨーロッパ式的生活様式を取り入れ、都市に住むアーバン・マオリが増加するとともに、マオリの伝統は薄れ、彼らのアイデンティティも



希薄なものになっていったのである。

このような状況に対する反省は、1960年代後半から次第に大きなうねりとなり、マオリ的なものを取り戻す、文化運動の様相を強くしていった。それは、マオリ語の回復、マオリ学校の創設、ヨーロッパ人に剥奪された土地、文化財の返還など、様々なムーブメントとなってわき上がった。マオリの伝統的自然観、環境観の回復も、このマオリ復興運動の流れの中にある。特に、世界的な環境意識の高まりとともに、ニュージーランドでは、1991年、画期的な「資源管理法（RMS）」が制定された。ニュージーランドの環境基本法に相当するこの法律は、マオリと環境との関係を考える場合、非常に大きな意味を持っている。

「資源管理法」は、ニュージーランドの環境政策を根本から変えるものといってよい。資源管理法は基本的に、計画を策定したり開発したりする行為が、周囲の環境に及ぼす影響を推定する手続きを定めている<sup>29)</sup>。しかも、その思想は、合意形成と先住民マオリの権利保護である。

資源管理法7条において、イウイを法的にも環境の守護者と認め、自治体は、イウイと共同で環境保護にあたるべきである、と述べられている。また、6条では、マオリの人々、その文化、そして伝統が、祖先からの土地、水、場所、聖なる地、その他聖なるものと密接に結びついていることを認識し、国民的重要事項として扱われねばならないと規定されている。

ワイタケレ市は、2つのイウイ、テ・カウエラウ・ア・マキとンガティ・ホアトゥアと共同歩調をとり、資源管理法6条、7条に沿った施策をすすめている。また、市は、一般の人々に、イウイと実際に話し合うようすすめている。そして、両イウイも、住民との対話には、すすんで応じている。ここでも、参加やコミュニケーションに対して、市が媒体となり、人々やコミュニティの参加を促しているのである。

たとえば、資源管理法によって、資源利用承認の正式の事前協議が必要となる場合、市は次のような処置をする。

1. 環境が保護されるべき土地で工事が行われる場合、申請者は、水路、森林、土地の生命力に対して強い影響があるかどうかを、考慮せねばならない。市は、イウイにすぐ通知し、イウイは申請書を評価する。場合によっては、市は、申請者に、環境影響について、イウイと直接話し合うよう求める。

2. 開発計画が聖なる場所に衝撃をあたえる場合、土地所有者はイウイと事前協議しなければならない。市は、イウイ、土地所有者と共同で、もっとも良い解決法をさぐることになる。

資源利用申請にあたっての、さらに具体的な事前協議の手続きについては、テ・カウエラウ・ア・マキ・トラストが発行しているガイド（資料2）<sup>30)</sup>に述べられている。

このガイドは、資源管理法が制定された翌1992年3月に早くも作成され、開発を行う資源利用申請者が、テ・カウエラウ・ア・マキと事前協議を行う際の手順について、彼らの歴史と大地との関わりを含め、簡潔ながら極めて具体的に記述している。その中心となるのは、資源の開発、保護に関して、マオリとその文化、そして彼らが大地とむすんだ特別な関係を十分に考慮しなければならないということである。そのためには、テ・カウエラウ・ア・マキが、開発によって影響を受ける団体であるかどうかの識別が最も大切になる。事前協議の手続きでは、まず、資源利用申請者が、自分の計画が環境へあたえる影響を評価する。そして、テ・カウエラウ・ア・マキが影響を受ける団体であると判断された場合、事前協議に入る。申請者は、環境評価書、史跡報告書、予定表を提出し、テ・カウエラウ・ア・マキから返答を受け取る。テ・カウエラウ・ア・マキ資源管理官が現地を視察した後、計画に対して評価がなされる。資源管理官は、管理局に、回避、修復、緩和、いずれかを勧告をする。必要な場合はさらに情報を集め、計画について、是認か反対かが関係機関に通知される。それを考慮して、関係機関は、計画について、是認、却下の決定をする。

このように、事前協議の手続きには大変手間がかかるが、それは合意形成プロセスのなかで事前協

議が重要な位置をしめていることのあらわれでもある。

マオリは、土地の占有を主張しているのではない。彼らが先祖代々引き継いできた土地にまつわる彼らの文化とそれが刻み込まれた環境を守りたいのである。このことは、彼らのいう「環境」の意味に表れている。彼らにとって、「環境」とは、「人々とコミュニティを含んだエコシステムとその構成要素」すべてをさすのである。

資料2の中では、次のように述べられている。

「テ・カウエラウ・ア・マキは、我が部族の領地を先祖代々監督し、責任をおってきました。その責任とは、ある意味では次のようなものです……人間が環境と相互作用する場合にはいずれも、持続可能な方法で運営せねばならない。このような監督権の行使に対する私たちの能力に著しい影響がある場合、テ・カウエラウ・ア・マキは、あなたの計画に関連して、事前協議を要求するでしょう」

「保護下にある土地、水、墓地やその他、我が部族の領地内の所有物について、物理的自然資源がもつマナ（霊的威光）を守る責任が、テカウエラウアマキにはあります。このマナとは、全存在あるいはエコシステムを自律的に持続させ、生命を維持する潜在力あるいは生命力と考えることができます。あなたの開発が、我が部族領域内の物理的・天然資源が有するマナに対して、著しい影響を与えるかどうかについて、テカウエラウアマキは、あなたの計画に関係した事前協議を受けるよう、あなたに求めるでしょう。」

## 6. コミュニティの自律活動とマオリ・プロバイダー

ワイタケレ市は、マオリと多くの協同作業をくみ、マオリの価値を市政に反映させ、多くのサービスを提供し、マオリとコミュニティの福祉増進に寄与してきた。特に、環境、旅行業、雇用促進、健康、幼児に関するマオリ団体との共同プロジェクト、イウイにとって重要な場所の保護、資源管理に関するイウイの計画に対する人と資金の提供などである。一方、これらとは独立に、マオリの側から、自分たち自身のためにサービスをつくりだし、提供しようとする試みが多くなされるようになった。その際、コミュニティあるいはマラエが中心となることが多い。

マオリは、古くから、多くの人々が集える共同建築物、マラエを維持、管理してきた。コミュニティを尊重するマオリは、マラエをコミュニティの象徴としてきたのである<sup>30)</sup>。近代生活様式が浸透するにしたがい、マラエも衰退したが、近年、各地に新たなマラエが建設されている。ワイタケレ市には、現在、9つのマラエがある。そのうち、2つがコミュニティを基盤にした本来のマラエである。他の7つは、マオリ学校（区）を基盤にしている



マオリの集会所、マラエ（オークランド大学）



伝統的彫刻が施されたマラエの内部

が、もちろん、コミュニティの使用にも供される。タンギ（葬儀）、集会、親族の集まり、ワークショップなどである。ワイタケレ市も、市政におけるマラエの重要性を認識し、マラエを援助している。

マラエは、建物としてだけでなく、コミュニティの核でもあり、コミュニティにサービスを提供し、マオリ・コミュニティを強化する役割を果たしてきた。その例を、健康と教育にみることができる<sup>26)</sup>。

テ・ホアナウ・オ・ワイパレイラ・トラストは、ワイタケレ市における有力な団体であるが、コミュニティの役割を示す一つのモデルケースでもある。その活動は、多部族に開かれたマラエであるホアニ・ワイティティ・マラエが1980年に開設されたときに始まる。今日、この団体は、ワイタケレ市における社会的、教育的活動の主要な部分を担っている。たとえば、教育では、就学前から中等教育まで多くの学校を運営し、幅広い教育サービスを提供している。職業教育や成人教育のコースまでである。さらに、近い将来、マオリ大学の設立も計画している。社会的サービスに関しては、特に、健康サービスがすぐれている。神経科から歯科までの幅広い医療サービスはもとより、公衆衛生に関する情報、家庭内暴力や禁煙といった教育コースを提供している。また、家計相談、家族相談、放課後サービス、障害者へのホームヘルパー、アート・ワークショップの開催、ソーシャルワーカーの学校派遣なども行っている。さらに、テ・ホアナウ・オ・ワイパレイラ・トラストは、ウェストゲート・ショッピングモールの主な出資者であり、都市在住マオリの土地所有権や漁業権の代弁者でもある。マラエから発生したトラストは、コミュニティのマオリの人々に、幅広いサービスを提供し、マオリの人々の生活と福祉の向上に大きく寄与しているのである。

このようなマオリによるマオリのためのサービス機関は、マオリ・プロバイダーとよばれている。現在、ワイタケレ市には、マオリの社会サービス・プロバイダー、健康サービス・プロバイダー、教育サービス・プロバイダーが、それぞれ複数存在し、活発な活動を行っている。マオリ・プロバイダーは、コミュニティ（特にその中核であるマラエ）によるもの、コミュニティを基盤としていない団体によるもの、個人によるものなど様々な形態があるが、やはり中心は、コミュニティ（マラエ）によるサービスである。

現在、ワイタケレ市には、コミュニティを基盤とした2つのマラエをはじめとして、9つのマラエがある。上述のホアニ・ワイティティ・マラエは、非常に大きく、マオリはもとより、マオリ以外の住民に対しても、コミュニティ・サービスを行っている。

他のマラエも同様のサービスを行っているが、ワイタケレ市においては、教育と健康に関するサービス網の発達が特徴的である。

ワイタケレ市の9つのマラエのうち7つが、マオリ学校を基盤としたマラエであることからわかるように、ワイタケレ市における教育サービス、特に、学校教育の発達にはめざましいものがある。ワイタケレ市のマオリ学校は、ピタ・シャープラス博士をリーダーとして、ニュージーランドで最初に設立されたマオリ学校（クラ）をはじめ、7校が、マオリ語による教育を行っている。マオリの現在と未来を考える場合、これらのマオリ学校は極めて重要である。その実態と意義については、稿をあらためて述べたい。

さらに、死者をおくる埋葬サービスもマオリにとって重要である。かつて、マオリの死者は、地元のマラエに運ばれ、葬儀がとり行われ、マオリの墓地に埋葬された。いまでも、この伝統的な葬儀は一部で行われている。しかし、生活様式の変化、特に、都市生活をするマオリの増加とともに、一般的な墓地も必要とされるようになった。ワイタケレ墓地は、マオリの要求をいれて、マオリに墓地を提供している。この埋葬サービスも、マオリ・コミュニティやマオリのボランティアによって行われることが多い。しかも、なるべく、伝統的な方法で葬儀が行われるようになった。葬儀という人生の最大事を契機にして、マオリのアイデンティティの復活がなされているのである。

筆者は、一人のマオリ男性（50代）の葬儀に出席する機会をえた。マオリの人々にとって、重要なのは、埋葬当日ではなく、その前の通夜であるように思えた。埋葬前の二晩にわたって、人々は、死



通夜の伝統的マオリ料理



マオリ説教者による通夜のスピーチ

者の家に集う。戸外のテントの下、炊き出しの伝統食を皆で食べた後、棺が安置された部屋に全員が集まる。棺は、その家伝来の特別の布で覆われ、近親者がずっと添い寝する。そのまわりで、伝統的な方法で死者を弔うのである。まず、マオリの説教者が、マオリ語となまりの強い英語で死者をおくる言葉を述べる。そのあと、出席者一人一人が、お別れのスピーチをする。男も女も、故人の思い出を語る。スピーチには、ジョークやおもしろいエピソードが必ず挿入され、人々の笑いをさそう。そして、涙、涙。スピーチの最後は、必ず、歌で締めくくられる。60人（ヨーロッパ系1人、アジア系1人）ほどの参加者のスピーチと歌は、夜を徹して続くのである。驚いたことに、故人と面識のない筆者も、日本からの友ということで、スピーチと歌を披露することになった。しかも、二晩とも、別のスピーチ、別の歌。次の日、死者は、ウルパ（墓地）に埋葬される。ワイタケレ市のマオリは、30年間、公共の墓地への埋葬を要求してきた。その要求はなかなか受け入れられなかったが、1996年、ついに、ワイタケレ墓地（シドニーに大規模な墓地ができるまでは、南半球最大の墓地）への埋葬が認められた。現在、この墓地には、成人マオリと子供用、2ヶ所が確保されている。

このような葬儀サービスも、マオリ・プロバイダーやボランティアによって行われている。

### 7. 多様性とその課題

ニュージーランドがそうであるように、ワイタケレ市もまた、民族的多様性に富んでいる。統計（NZ Census）によれば、ワイタケレ市の民族的多様性は、近年増大している。現在、ワイタケレ市の人口構成は、図4のとおりである<sup>32)</sup>。ニュージーランド・ヨーロッパ系住民、太平洋諸島民、ニュージーランド・マオリ、アジア系住民の順であり、アジア系を除けば、オークランド地域の統計とほぼ等しい。

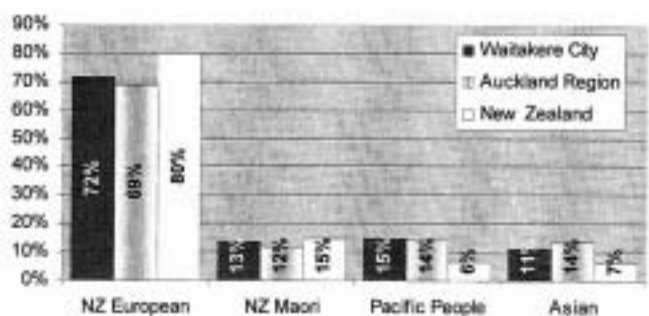


図4. ワイタケレ市人口の構成<sup>32)</sup>

また、ニュージーランド全体と比較すると、アジア系住民と太平洋諸島民が多く、その分、ヨーロッパ系住民とマオリの割合が小さい。したがって、ワイタケレ市を含めたオークランド地域は、ニュージーランドの中でも、特に多様性に富んだ地域といえる。これらの民族的集団は、言語、文化、習慣、歴史などにより、さらに、多くの集団に分割される。2001年統計では、200以上の集団の存在が認められた。ニュージーランドの人口動態調査において、民族性は自己申告によって行われ、一つ以上の選択が可能であるので、得られた結果は複雑な内容を含んでいる。が、いずれにせよ、ニュージーラ





市民権授与式



太平洋諸島民フェスティバル

ンド、そしてワイタケレ市が、民族的多様性に富んだ多元的社会であることは疑いもない。

ワイタケレ市において、ヨーロッパ系住民は、1991年からの10年間に4.2%増加した。一方、マオリの増加率は38.7%、太平洋諸島民は55.4%である。アジア系住民では、実に、300%近い増加である。ヨーロッパ系以外の住民の急激な増加は、人口動態調査自己申告時の民族的アイデンティティの増加や年間3000人ほどの移民にもよるが、人口の年齢構成比（図3）にみられるごとく、マオリの高い出生率によるところも大きいと考えられる。したがって、ワイタケレ市では、今後も、さらに、民族的多様性は増すと予想される。

このように多様な人々がワイタケレ市を構成していることを、市は強く意識している。そして、多様性を、市政の根本原理のひとつとして、様々な施策を展開している。

ワイタケレ市の民族的多様性に対する基本姿勢は、筆者が参加したいくつかの行事にも見てとることができた。まず、市民権授与式である。月4回もたれる授与式に出席する人々の肌の色、衣服、言語は実に様々である。アジア、イスラム圏、南米、太平洋諸島などなど。ワイタケレ市において、年間3000人ほどの人々が、ニュージーランドの市民権を得る。ワイタング条約の条文とイギリス女王の写真が正面に掲げられたホールで、出席者一人一人が記念の花を受け取る。授与式では、市側から、市長と数人の職員がスピーチと説明を行う。そのとき、いずれも、次のようなフレーズでスピーチを締めくくるのが常であった。

「われわれはあなたがたの文化と社会的多様性を尊重します。あなたがたも、あなたがたの文化と社会、そしてコミュニティを大切にしてください。」

それは非常に印象的な光景であった。

ワイタケレ市は、職員数が650人ほどの比較的小規模な自治体である。多様性を尊重するという市の基本方針は、市職員の構成にもあらわれ、マオリはもちろん、フィジー、南アフリカ、アジア出身者など、幅広く人材を登用している。市職員たちは、それぞれのコミュニティの活動を援助し、自らも様々な民族的行事へ積極的に参加する。たとえば、「太平洋諸島民フェスティバルー文化、伝統、食べ物ー」のオープニングにおいて、民族衣装（ほとんど裸に近い）を身につけ、迫力ある伝統的ダンスを披露したのは、教育課に所属するフィジー出身の職員であった。

また、「文学のつどい」（ヨーロッパ系住民が中心）では、市長やマオリ系職員の挨拶につづいて、マオリ学校生徒が伝統的な歌と踊りを披露していた。

さらに、ワイタケレ市のマオリ自身も、民族的多様性が重要であり、尊重されるべきであることを次のように表現している。

「山々、川、土地、それに動植物すべては、わたしたちのふる里、ワイタケレです。大地の民であるテ・カウエラウ・ア・マキとンガティ・ホアトゥア、そして、最近この地へやってきたすべての民一



「文学の集い」で歌うマオリ学校の生徒



パートナー・リサーチ・プロジェクト

ヨーロッパ人、ニュージーランド各地からのマオリ、太平洋諸島民、アジアやその他多くの国々からやってきた人々は、すべてこの地の民なのです。ワイタケレのマオリは、その一部です。わたしたちは部族、民族、国を超えてむすばれています。わたしたちのマラエは、世界中の人々を暖かく迎えます。」(「テ・タウマタ・ルナンガ」のメッセージ<sup>27)</sup>)

しかし、マオリを含め、市とマイノリティとのパートナーシップが、順風満帆で進行しているわけではない。市とマオリとイウイ、その他多くの組織とのコミュニケーションは、必ずしも円滑ではないし、マオリやマオリ・コミュニティの意識の高揚、参加も期待したほどではなかったのである。「テ・タウマタ・ルナンガ」の存在すら知らないマオリもいた。これを最も深刻に受けとめたのがほかならぬ「テ・タウマタ・ルナンガ」である。「テ・タウマタ・ルナンガ」は、マオリの価値観や意見を市政に反映させることにはめざましい成果をあげたけれども、「テ・タウマタ・ルナンガ」の存在や活動の意義も含め、それらが、個々のマオリやコミュニティに十分認識されていないことに気づいたのである。

このような中、「テ・タウマタ・ルナンガ」は、2003年7月、長期行動戦略プランを発表した。そして、これまでの市とマオリとの協同をさらに発展させるべく、2003年9月、新しいプロジェクトを開始した。「パートナー・リサーチ・プロジェクト」と銘うたれたこのプロジェクトは、「テ・タウマタ・ルナンガ」の目的である、マオリの価値を協同・参加によって実現するための方策を研究する。このプロジェクトは、「テ・タウマタ・ルナンガ」をさらに強化し、コミュニティやマオリ個人とのコミュニケーションを円滑にし、人々の意識を高め、参加を促すにはどうした良いかを研究し、その方法とタイムテーブルを作成するのである。そのためには、マオリ出身の議員を増やすのみならず、コミュニティ・メンバーに対して、ワイタング条約の理解、ワイタング条約の精神で設置された「テ・タウマタ・ルナンガ」の意義の理解など、啓蒙活動が必要である。市、「テ・タウマタ・ルナンガ」、コミュニティ間で、ワイタング条約をめぐる議論も必要である。そして、マラエでの「テ・タウマタ・ルナンガ」の報告会なども含め、「テ・タウマタ・ルナンガ」の活動とその成果を地域住民へ還元する方法を研究し、成果を得ようとしている。

筆者もオブザーバとしてプロジェクトの初会合に参加したが、オークランド大学の20、30代社会学者と地元の若いプランナー達の自由闊達な議論は、官制審議会のイメージを大きく越えるものであった。しかしながら、問題は非常に大きく根深い。パートナーシップと参加をめぐる本質的課題を含んでいるからである。したがって、このプロジェクトの成果と、その「テ・タウマタ・ルナンガ」活動への反映とが、今後のパートナーシップのあり方のみならず、ワイタケレ市における持続可能なエコ都市実現の成否を決めることになるかもしれない。

## 8. まとめ — マオリ社会の持続可能性 —

社会システムが持続可能であるためには、「代謝」、「関係性」、「自律」の三条件が必須である。近年、マオリは、極めて活発に「代謝」（生産活動、消費活動）を行っている。統計的に見ても、1950年代以降、マオリの人口は急増している。マオリの生活状態は、職業・収入、教育、健康、住居などほとんどの点において、ヨーロッパ系住民よりも劣っている<sup>33)</sup>けれども、かつてのような悲惨な状況は脱している。乳幼児の死亡率は依然として高いが、より高い出生率による人口の自然増加を、マオリとマオリ・コミュニティは包含し、彼らの膨張は続きそうである。マオリが、どうして近代化に適応してきたかについては慎重な考察が必要であるが、近代生活への適応が、マオリの現在をつくり出していることはまちがいない。

このような活発な「代謝」は、しかし、それ自身ではでは成り立ち得ない。他の社会システムとの「関係性」、そして、マオリ・コミュニティの「自律」とが必要である。マオリ、マオリ・コミュニティと他の社会システムとの「関係性」については、ワイタケレ市におけるパートナーシップを中心にすでに詳述した。ワイタケレ市において、マオリが様々な人々、団体、機関、行政と良好な関係をつくりあげ、維持できたのは、持続可能なエコ都市を、住民との協同と参加で実現しようとするワイタケレ市の基本姿勢によるところが大きい。が、もうひとつ、マオリの世界観も無視できない。マオリと環境の項で述べたように、マオリの世界観、環境観はホリスティックである。彼らは、世界や環境の全体性を問題とする。それは、人と人、人とモノとの間の無数の関係性によって成り立っている。したがって、多様性の尊重も、彼らにとってみれば自然なことにすぎないだろう。

社会の持続にとって、もうひとつの重要な要素は、「自律」である。マオリ社会が持続可能であるためには、外部から加えられる圧力や内部に生じる矛盾に対して、社会システムを内部から、調整、修正、改変することが必要である。この点において、マオリ・プロバイダーの役割は大きい。多くのマオリ・プロバイダーは、商業的展開をしており、マオリの雇用増大をもたらしているので、「代謝」に寄与している。しかし、マオリ・プロバイダーの最大の意義は、マオリのアイデンティティの獲得とマオリ・コミュニティの強化であろう。前述のように、マオリの衰退とそれに続く西欧化への適応は、マオリ文化の衰退とアイデンティティの希薄化をもたらした。人口の増加やマオリの見かけ上の繁栄と並行して、マオリであることそれ自身が危機をむかえていたのである。そのような状況の中で、マオリによるマオリのための社会サービスは、衰退しはじめていたコミュニティを活性化し、マオリの伝統や文化を人々に再認識させたのである。

オークランド大学のフィオナ・クラムらは、ニュージーランド各地のマオリ・プロバイダーを調査し、分析した<sup>34)</sup>。そして、マオリ・プロバイダーが成功するためには、人々のニーズを把握し、それに応えられる技術と組織が必要なことはもちろんであるが、さらに、プロバイダー・サービスが、イウイマラエを基盤として行われ、コミュニティに寄与すること、そして、プロバイダーが、カウパパ・マオリ（確固としたマオリ精神、哲学）にもとづいてサービスを展開することが重要である、と結論づけている。ワイタケレ市におけるマオリ・プロバイダーの多くは、これらの条件を満たしているといえよう。

マオリ社会の自律に関し、もうひとつの重要なものは教育である。マオリ復興運動の一環として、マオリ語による教育をおこなうマオリ学校（クラ）が、ニュージーランド全土に設立されている。ニュージーランドにおける最初のクラは、ワイタケレ市に設立された。それ以来、この地のマオリは、教育に非常に力をそそいできた。自前の教育によって、子どもたちが、マオリとして立派に成長し、それがコミュニティを強化し、マオリの繁栄をもたらすと信じているからである。

筆者は、同様の分析をアーミッシュの学校についても行った。アーミッシュの場合、アーミッシュ学校は、彼らの価値が損なわれないための防御の意味が大きい<sup>35)</sup>。それに対して、マオリの教育は、マオリ的なものの回復を第一義的に目的としているので、社会システムの持続性に対してより積極的

な意味をもっているといえるだろう。

以上、ニュージーランドという多元社会のなかで、マオリと自治体との関係、そしてマオリの自律行動が、マオリ社会の持続性とどのような関係にあるかを、エコ都市ワイタケレをケーススタディとして考察した。

ニュージーランドは、行財政改革先進国として有名であるが、改革はニュージーランド社会の活力を喪失させ、疲弊させてもきた。その負の遺産は社会の隅々にまで及んでいる。特に、新たな挑戦への気概を損なわせているように感じられた。そのようななかで、ワイタケレ市において、マオリと市が行っている壮大な試みは、福祉と平和を国是としてきたこの国の伝統が、小さな市の実践の中に生きていることを再認識させてくれるのではないだろうか。

**謝辞：**本稿をまとめるにあたって、ワイタケレ市マオリ室長ワラヒ・パキ氏には大変お世話になった。また、マオリ研究全般への御教示をいただいた、オークランド大学国際マオリ先住民教育研究所長リンダ・スミス教授、フィオナ・クラム博士に感謝する。資料1, 2の訳出、地図の作成には、岐阜大学大藪千穂助教授の助力を得た。併せて感謝する。

本研究は、文部省科学研究費B(2) 14402042「伝統的ライフスタイルと情報の主体的管理による持続可能な社会の展望 — アーミッシュ、マオリ、アボリジニ社会と近代社会の比較研究 —」(代表、杉原利治)によった。

## 参考文献

- 1) 杉原利治『21世紀の情報とライフスタイル — 環境ファシズムを超えて』論創社, 2001年, 8, 13章
- 2) D.Michel Warren, L.Jan Slikkerveer and David Brokensha, *The Cultural Dimension of Development - Indigenous Knowledge Systems*, Intermediate Technology Publishing, 1995
- 3) Doris M. Schoenhoff, *The Barefoot Expert- The Interface of Computerized Knowledge Systems and Indigenous Knowledge Systems*, Greenwood Press, 1993
- 4) Laura Nader, ed., *Naked Science - Anthropological Inquiry into Boundaries, Power, and Knowledge*, Routledge, 1996
- 5) Tim Ingold, *The Perception of the Environment*, Routledge, 2000
- 6) Roy F. Ellen, Peter Parkes and Alan Bicker, *Indigenous Environmental Knowledge and its Transformations: Critical Anthropological Perspectives*, Harwood Academic, 2000
- 7) Kathryn Scott, Julie Park and Chris Cooklin, From 'sustainable rural communities' to 'social sustainability': giving voice to diversity in Mangakahia Valley, New Zealand, *J. Rural Studies*, Vol.16, 433-446, 2000
- 8) Toshiharu Sugihara, Chiho Oyabu, *New Strategies for Sustainable Society. I.The Role of Environment, Information and Lifestyle in Socio-organic Systems. The Journal of ARAHE*, Vol. 41-46, 1996
- 9) 大藪千穂, 杉原利治, 持続可能な社会のための生活指標と消費者教育, *消費者教育*, 17巻, 13-24, 1997
- 10) 杉原利治, 人間社会システムからみた情報・環境・ライフスタイル, *あうろーら*, 10巻, 155-163, 1998
- 11) 杉原利治, 「アーミッシュと現代社会」(ドナルド B. クレイビル, 杉原, 大藪訳『アーミッシュの謎』所載), 論創社, 1996年, 189-208頁
- 12) 杉原利治, アーミッシュのライフスタイル, *あうろーら*, 7巻, 43-53, 1997
- 13) Chiho Oyabu, Toshiharu Sugihara, *New Strategies for Sustainable Society. II.The Perspectives of an Alternative Lifestyle in Well-developed Countries through Amish Way of Life. The Journal of*



- ARAHE, Vol. 85-93, 1997
- 14) 杉原利治, 「アーミッシュの生活規範—再洗礼派と田園」(『比較法史研究 8 複雑系としてのイエ』), 未来社, 1999年, 237-252頁
  - 15) Toshiharu Sugihara, Chiho Oyabu, Environment-Concerned Lifestyle and Information- Comparative Study of Amish and Modern Society, 地球環境研究, Vol.53, 131-152, 2002
  - 16) 杉原利治『21世紀の情報とライフスタイル — 環境ファシズムを超えて』論創社, 2001年, 9, 12章
  - 17) Keith Sinclair, A History of New Zealand, Penguin Books, 2000
  - 18) Claudia Orange, The Story of a Treaty, Bridget Williams Books, 2001
  - 19) Mason Durie, Te Mana, Te Kawanatanga - The Politics of Maori Self-Determination, Oxford University Press, 1998
  - 20) Doria Alves, The Maori and the Crown - An Indigenous People Struggle for Self-Determination, Greenwood Press, 1999
  - 21) Algie Fleras and Jean J.Elliott, The Nations Within - Aboriginal-State Relation in Canada, the United States, and New Zealand, Oxford University Press, 1992
  - 22) The State of Waitakere City - social environment - who lives in waitakere city, Waitakere City (<http://www.waitakere.nz.gov>)
  - 23) Bob Harvey, Bending Cities Towards Sustainability , Mayors' Asia Pacific Environmental Summit, 1999, Honolulu, Hawaii
  - 24) Greenprint, Waitakere City Council, 1999
  - 25) Ecocity, Waitakere City Council(<http://www.waitakere.nz.gov>)
  - 26) The Green Network, Waitakere City Council(<http://www.waitakere.nz.gov>)
  - 27) Te Taumata Runanga - Long Term Strategy and Action Plan, Waitakere City Council, 2003
  - 28) The State of Waitakere City - Maori Community ; Waitakere City (<http://www.waitakere.gov.nz>)
  - 29) 平松紘『ニュージーランドの環境保護 — 「楽園」と「行革」を問う—』信山社, 1999年, 166頁
  - 30) Te Kawerau a Maki - A Guide for Consultation Under the Resource Management Act, Te Kawerau a Maki Trust, 1992
  - 31) Wena Harawira, Te Kawa o te Marae, Reed Publishing, 2000
  - 32) NZ Maori Demographics for Waitakere City, Waitakere City Council, 1996
  - 33) 平松紘, 申恵丰, ジェラルド・P・マクリン『ニュージーランド先住民マオリの人権と文化』明石書店, 2000年
  - 34) Fiona Cram and Kataraina Pipi, Maori Research Development Volume 4. Determination of Maori Provider Success, International Research Institute for Maori and Indigenous Education, Auckland University, 2001
  - 35) 杉原利治, 「アーミッシュの教育と現代社会」(サラ・E.フィッシャー, レイチェル K. スタール, 杉原, 大藪訳『アーミッシュの学校』所載), 論創社, 2004年, 169-206頁

## 資料 1

## 持続可能な街づくりへ向けて

ボブ・ハーベイ(ワイタケレ市長, ニュージーランド)

ミヒミヒ。これは、わが国の先住民、マオリの昔からのあいさつの言葉です。ニュージーランドの社会は比較的新しく、その信念、システム、そして価値の多くは、ヨーロッパの植民地主義によって造られました。しかし、われわれはマオリの習慣や伝統にも等しく立脚しています。マオリの文化は、われわれの社会の核心部にあります。したがって、われわれの中心をなしているのです。

われわれがおこなっている都市づくりのアプローチには、持続可能性と並んで、ある精神性というものが存在しています。世界中で、市行政府は、持続可能な発展に挑戦しています。コミュニティ、政治リーダー、そして、ビジネス界は、私たちの未来が、今私たちのとる行動にかかっているということを認めています。

ニュージーランドの私たちは、環太平洋やアメリカの多くの都市において、持続可能な未来にむけ、新しい重要な企画が作られ、実行されていることに敬意を表します。われわれもまた、本質的な変革を注視しています。ここで、世界的な建築家であり、環境主義者である私のよき友人、リチャード・ロジャー卿の言葉を引用しましょう。「都市は環境災害を引き起こしている。しかし、都市生活にこのようなことが不可避だと断ずるのは誤りだ」。ロジャー卿が言いたいのは、次のようなことでしょう。われわれは変わらなければならない、さもなければ、滅んでしまうだろう。必要とされている変革は実現可能であるとわれわれは信じています。このことは、とてもよい知らせだと思えます。

ニュージーランドのワイタケレ市は、アメリカの基準からすれば、人口15万5000人の小さな町にすぎません。人口130万人をようし、さらに拡大しつつあるオークランドの一部です。繰り返します。この規模は、皆様方の感覚からすれば小さいかもしれません。しかし、われわれからすれば大きいのです。ワイタケレ市は、二つの大洋に囲まれたすばらしい場所にあります。そして、その中心部には、降雨林「ワイタケレ・レンジ」があり、それはよみがえりつつあります。

社会的、文化的、環境的にみても、この地は植民地化された情景といわねばならないでしょう。8世紀から14世紀にかけて、マオリの人々が、最初、太平洋を越えて海から移動してきました。彼らの文化は、昔も今も自然と密接につながっています。彼らは強い部族(イウイ)構造を持ち、海岸沿いや湖沿いの村に住み、洗練された素晴らしい文明を築いていました。

イギリス領下、18、19世紀の植民地主導の旗の下、西洋的な社会、経済、文化生活が侵食してきました。ヨーロッパ人がマオリ人の土地を奪い、それと一緒に資源も奪ったため、1840年のワイタング条約で誓約された協同という当初の精神は崩れ去ったのです。ヨーロッパ人の拡張に伴い、自然を管理し、封じ込めようという欲望ももたらされました。風景や社会規範が非常に大きく変化しました。マオリ人は、事実上、下層民になってしまったのです。

最終的な社会変化は、1940年から50年代にかけてやってきました。アメリカの文化的、経済的支配です。車社会、都市への移住、都市のスプロール現象、そして消費文化。ワイタケレ市の遺産は、低密度の住宅開発、職場への長い通勤です。ロサンゼルスと同程度に車に依存した社会です。また、マオリ人と太平洋諸島民が特にオークランドで、熟練度の低い職業についたために、社会的分離もおこりました。私たちの都市は、多くの点において、北アメリカとよく似ているのです。平屋の家屋と車2~3台分の駐車スペースを作るために、土地は平坦に削られました。

その結果として生じた問題は、世界の多くの新しい都市に共通してみられるものです。廃棄物、混雑した高速道路、大気汚染と公共交通機関の不足。肥沃な農地は、住宅用に使われ、港湾には土砂が流入し、生態系が損なわれています。水は、はるかかなたのダムから引かれ(にもかかわらず90%の水はムダに使われている)、下水や降雨時の汚水(特に道路から流れ出たもの)が、河川や港に流れ込んでいます。ごみの量は、人口が増加するより

も早いスピードで増えています。

ニュージーランドでは、1980年代と1990年代の経済改革によって、若者の失業率ははね上がり、(自殺を含めた)社会病理が蔓延しました。これらの病は、若者による拒否や反抗といった言葉、即ち、彼ら自身の「アート」にさえなっていたのです。これらは、全て持続不可能な破壊的要素であり、つい最近まで、それがニュージーランドの生き方だったのです。

しかし今、私たちは変化をみてとることができます。核兵器やアパルトヘイト反対の輪が広がっています。そしてまた、環境問題についての関心が高まり、環境法策定の動きも広がっています。ニュージーランドでは、1991年、資源管理法(RMA)の制定によって、重要な社会変化が起きました。これは、たぶん、もっとも重要なできごとであり、マオリ文化のルネッサンスといってもよいでしょう。なぜなら、林業や漁業のような資源は、部族(イウイ)に移譲され、不幸な歴史に伴う不満が解消されつつあるからです。環境法が変更されたことによって、環境の管理に、強く焦点があてられるようになりました。そしてまた、マオリルネッサンスは、社会正義を前面に打ち出したのです。

経済的变化は、これまでよしとされてきた、都市の住宅、交通、水道、下水のインフラにかかるコストのあり方を再考させ、真のコストに光をあてました。変革という文脈がつけられ、地方自治体はそれに挑戦しました。1992年以降のわれわれの政治ビジョンは、都市を、社会的、経済的、環境的に大きく変化させることです。これは、政治レベルでは、大胆さと明快さを意味します。コミュニティレベルでは、参加を意味しています。完全な参加です。

私たちは、あるビジョンから始め、それは現実になりつつあります。変化に対するワイタケレ市のビジョンは、これまで当たり前のようになされてきた住宅街や工業地の拡張ではなく、コンパクトな町づくりを目指すことです。私たちの新しい中心街は、よりコンパクトであり、よみがえりつつある自然環境に適合するよう企画されています。ここ20年以内に、私たちの新たな都市ビレッジは、公共交通機関、グリーンネットワーク、そして野生動物の小道で結ばれることでしょう。このような、森林と公園のネットワークは、私たちの原野から住宅街、そして海まで伸びることでしょう。

私たちは、よく知られているように、19世紀後半にヨーロッパ人がニュージーランドに持ち込んだ都市生活様式に依っています。しかし、ヨーロッパ様式と並んで、私たちはマオリによる新たな都市生活様式を目の当たりにしています。古い伝統と近代的様式を結合し、エキサイティングな新しい都市様式が生み出されているのです。ニュージーランドでは、マオリルネッサンスとアジェンダ21の動きから、新しい開発議題に沿った、新しいコミュニティの構想が生まれました。マオリルネッサンスは、ある意味では、過去のあやまちを正そうという、伝統部族としてのマオリと都市のマオリ、両者の決意から生まれたものなのです。

私の町では、ピタ・シャープラス博士のようなマオリ指導者が、雇用、教育、保健・社会サービスなどに、幅広く、主要な事業体をつくりあげています。これらのグループは、利益を求めるビジネス本来のやり方をも追求しています。これは、確信に満ちたエネルギーな運動であり、資源基盤を拡張し、全てのマオリに職業選択の幅を広げています。儀式のための場所(マラエ)を中心とした近代的マオリビレッジを作り上げたのは、その成果の一つです。そこでは、学校、職業訓練施設、スポーツ広場や住宅を維持し、発展させてきました。鍵となる場所を定め、それを鉄道のネットワーク上で主要な都市ビレッジに発展させていこうというアイデアを、私たちとマオリ・コミュニティが共同で暖め、育てています。これは、知恵と複合モデルを過去から抽出し、融合させて、21世紀の近代的コンセプトにしようとする例の一つなのです。私たちが目指している変化は、エコシステムの健全性、特色あるタウンセンターづくり、川や港岸の復元、地元の職業とサービスをさらに多く創出すること、そして、交通機関の選択といった事柄を優先しているという点できわめて重要です。そしてまた、日常的な政治経済的側面において、マオリと太平洋諸島民の存在が、目に見える形ではっきりと現れ、さらに、彼らがそこへ参加することを優先している点も重要です。

ワイタケレ市の哲学は、ダイナミックで公正な持続可能社会を創出するという使命に表現されています。この目標は大きいのですが、コミュニティにおける植林などの小さな事業や都市センターの完全改造などの大規模プ

プロジェクトによって達成できるはずです。私たちの場合、改造計画は、全人口のほぼ20%を占めるニューリンで行われています。これら市主導の企画が成功するかどうかは、各プロジェクトに、コミュニティがどれだけ幅広く参加できるかにかかっています。このようなプロジェクトには、市民の行動や消費パターンを理解することが必要です。さらに、変化に貢献し、利益を享受する市民の能力を理解することも必要とされます。これは全体的(ホリスティック)で統合されたビジョンなのです。

ワイタケレ市のこのアプローチには、これらの実践を、中核となる計画書「21世紀の緑の青写真」に示された長期ゴールに結びつけることも含まれています。また、私たちの理念に直結した包括的戦略と財政システムも含まれています。それは、単に新しい道路にお金をつぎ込んでオープニングのテープカットをする、といったような単純なものではありません。都市の土地利用、デザイン、密度や形態などについての国際的研究と結びついた、地域のエコシステムに関する知識、そしてそれらを脅かすものについての幅広い知識なのです。これらの活動の中で、ワイタケレ市は新しい都市の実現へむけて、以下のプロジェクトを展開しています。

- 生態学に基づいた、明確な土地利用システムのための地区計画
- 開発計画、都市計画の非官僚的な諮問サービス
- 4日間のシャレット/ワークショップという革新的な計画方法(企業、住民やコミュニティ組織によるニューリン・タウンセンターの再活性化企画のワークショップ)
- エコロジーやデザインを専門としたスタッフの新しい重要技術基盤
- 都市部での小規模下水プラントや自然湿地帯に流れ込む雨水の変換などのような革新的技術の開発と促進
- タウンセンターのグレードアップのために、市の予算を配分し、ビジネスパートナーを確保すること。例えば、最近なされた4000万ドルショッピングセンター街の再開発には、自然採光やリサイクリングプログラムなど、環境に配慮した多くの特色ある視点が市により提案され、取り入れられた。

市は、ビジネス的に施策を展開し、最も高い効果をあげています。例えば、商工部「ワイタケレ資産」は、250の住宅開発プログラムを担っています。これには、近くの湖や湿地帯に流れ込む雨水を利用するような、環境に配慮した数多くの施策を導入しました。ワイタケレ市は、種を植える助成金といったコミュニティプロジェクトも支援しています。また、家族に木の苗を提供して、赤ちゃんと一緒に地域の公園に植える「赤ん坊に木を」というコミュニティプロジェクトも援助しています。木は、子供とともに成長します。したがって、子供たちはずっとその土地に結びつくことになります。私たちは、また、奇抜な方法を用いて環境問題を啓発しています。近くの川から引き上げたゴミで本物と同じ大きさの牛のオブジェを2つ作り、一番交通量が多いタウンセンターの道路に飾っています。

戦略や資源を国際的に共有すること、特にアジェンダ21に加盟している都市間での共有は、私たちの仕事にとって極めて重要です。私たちのアプローチには、ビジネスやコミュニティ、そして環境に特に関心を持っている、マオリを含めた環境団体との強固な関係構築が必要です。私たちはまた、特に厚生、社会サービスについて、中央政府と関係をもたねばなりません。大学や研究機関もまた、私たちのプログラムや政策に多大な貢献をしてくれています。そして市政の側は、政治家とスタッフが、焦点を明確にして、皆同じ方向に向かって働くことが必要です。

最近4年間で、変革は確かなものとなってきました。いまや、便利で魅力ある持続可能な都市型ビレッジが実現しています。私たちは、「グリーンネットワーク」として、大規模な土地を確保しています。ゴミの山は依然として高さを増していますが、これによって、少なくともある程度は、実行可能な問題解決策を考える時間が私たちに与えられています。ゴミのリサイクルは、ほとんどの住民にとって、当たり前のこととなりつつあります。家庭ゴミのほぼ半分がリサイクルされています。家庭ゴミは、アメリカやイギリスが年間一人当たり350kgであるのに対して、ワイタケレ市ではわずか164kgです。

私たちは、新しい建築慣行の規準を開発し、それに見合う態勢を確立しています。水道工事を支援する都市計画は、下水処理に取り掛かっており、現在、土地の選定が行われているところです。私たちは、交通、下水、雨水に関して、地域協力がよりよくなされるための媒体となってきました。挑戦すべき主要課題として、車への依存



の問題がまだ残っています。そして、この地域は、都市部において、鉄道を中心とした公共交通機関を優先させることに、歴史上初めて同意したのです。外周部では、バスが優先的な公共交通機関となるでしょう。私たちはまた、エコシティという目標に見合う財政20年戦略の準備をすべく、内部的に重要な試みも行っています。これには、社会的、経済的福祉と同様に、環境の健全度を測る監視システムが含まれています。

最後に、私たちの経験にかんがみて、変革が成功する要因を以下に示します。

- ・ 関係を築くこと、そして、コミュニティや個人が参加すること
- ・ 情報、資源、知識をコミュニティにとって入手可能なものにする
- ・ 高い目標を設定すること
- ・ 高度な全体像、構想力、エネルギッシュな指導力を提供すること
- ・ 進展度を測り、成功を喜ぶこと
- ・ よい実践、標準的な実践をすること
- ・ 探究心を持ち、オープンな姿勢を保ちながら、楽観論と熱狂との間でバランスを取ること
- ・ 適応性があること
- ・ 独自のものだけでなく、世界的視野のすばらしいアイデアを認めること

民主主義を築いていくには、人々に対して、日常生活の事柄への関心を促し、そして、参加させることが重要です。このことは、強調してもしすぎることはありません。この地域では、地方自治体が非常に重要な役割を担っています。直接的な行動と投資、そして規制により、優先事項を決定しているのです。しかし、持続可能なコミュニティを築くための責任と能力は、明らかに地域のコミュニティそのものにあります。消費者、投資家、ビジネス界は、毎日、何千という意思決定を行っていますが、それらを利用することによって、自治体は、非常に重要なコーディネーターの役割を演じることが可能となるのです。

今、私たちは、新しい夜明け、21世紀に向かって前進しています。ニュージーランドにおいて、160年に及ぶ植民地時代の後、自分たちのコミュニティを再構築しているマオリのやり方は、意思決定とコンセンサス形成のモデルとなります。ネルソン・マンデラ氏のように、私たちは、人間と地球の持続可能性という目的を達成するために、辛さや分裂を乗り越えるよう、鼓舞されているのです。この道を進むべきだという声が、あまたの場所から、輝かしい実践から、そして傷つきやすい大地から聞こえてきます。また、人種差別や植民地政策などによって破壊された文化や経済を再構築している、太平洋諸島、私たちの市、そして、私たちの大地の先住民のエネルギーと願いからも聞こえてきます。私たちは、環境的持続可能性と社会正義とが、安定で、生産的な経済生活を営む上の基盤であると確信しています。

政治学者によれば、21世紀は、太平洋の世紀になるだろうとのこと。我がワイタケレ市は、この緑の海洋に面しています。ワイタケレ市は、次の1000年にふさわしい都市になるつもりです。人間的で、平和で、生態学的責任を負った都市です。このゴールの核には、古いマオリのことわざがあてはまるでしょう。ヘタンガタ、ヘタンガタ、ヘタンガタ(それは人、それは人、それは人)。

## 資料 2

## テ・カウエラウ・ア・マキ 資源管理法(RMA)に基づいた事前協議ガイド

### 1. はじめに

この資料は、テ・カウエラウ・ア・マキ(Te Kawerau a Maki)との事前協議の手続きに対する、資源利用承認申請者の意識を高めるために作られました。資源管理法(RMA)は、複雑なものですが、これによって、人々と環境との関係が持続可能なやり方で管理運営できるのです。資源利用承認事業の手続きにより、開発によって影響を受ける可能性のある団体は、そのことを知ることができ、彼らの主張を述べる権利が保障されるのです。テ・カウエラウ・ア・マキは、古くから地元の部族(イウイ)であり、オークランド地域の管理者でもあります。テ・カウエラウ・ア・マキは、次の世代のために、我々の自然資源を守りたいと願っています。そしてまた、守る責任を負っています。このため、我々は、当事者として、我が部族領内において、環境に影響があると考えられる活動を行っているすべての団体との間で、有意義な関係を築き上げたいのです。

### 2. 活動範囲

テ・カウエラウ・ア・マキは、伝統的にオークランド全地域と深いつながりを持っています。どの承認機関が承認を与えることになるにせよ、この資料に略述してある事前協議の手続きは、テ・カウエラウ・ア・マキの部族領域内においては全て同じです。私たちは、この資料を最も良い事前協議方法として推奨していますが、その利用は、手引きとしての範囲にとどめなければなりません。テ・カウエラウ・ア・マキは、個別の案件ごとに、この手続きを修正したり、強化させる権利を持っています。また、この資料に示されている手続きは、他の部族や準部族(ハプ)についても同じであると考えてはいけません。

### 3. 歴史の概略

「土地と海の恵みを受けて、カウエラウ(Kawerau)はどの首長にも税を支払わず、隣接する部族や準部族から支援活動を命ぜられることはなく、また、カウエラウの人々の許可なくしては、どの首長もカウエラウの漁場には行かない。」<sup>1</sup>

テ・カウエラウ・ア・マキは、タマキ・マカウ・ラウ (オークランド峡部)として知られる広大な地域において、大地の民としての地位を有する部族の一つです。テ・カウエラウ・ア・マキは、この地域における最初の居住者の子孫です。しかしながら、テ・カウエラウ・ア・マキは、私たちの祖先であるマキ(Maki)とその民がこの地域を征服し、住みついた1600年代初めから、部族として明確に存在してきました。

マキ、そして彼に従う人々は、一つの大きなグループとなり、オークランド峡部とカイバラ湾までの北の土地を支配しました。我が部族は、そのアイデンティティとして、テ・カウエラウ・ア・マキの名を残しました。この名前は、もともとはマキに関わるカイパラ地域で起こった有名な出来事に由来しています。この出来事から、彼の息子のうちの一人が「テ・カウエラウ・ア・マキ」と名づけられました。我々は、その子孫なのです。マキの他の子孫は、ンガティ・マヌヒリなど独自の部族の名前を受け継ぎました。

テ・カウエラウ・ア・マキは、ンガティ・ホェトゥア、ワイオフア、ンガティ・テ・アタなどの親類を、自分の居住地にしばしば招き入れました。また、シーズンになるとマヌカウ北部、ワイタマタ西部地域でのサメの捕獲キャンプにも招きました。土地のほとんどは深い森に覆われており、次の言い伝えにあるように、食料がとても豊富でした。

「魚が豊富な魚礁、鳥がたくさんいる木が広がる土地」

マキの偉大な孫であるテ・アウ・オ・テ・ホエヌアが、タマキ・マクラウ内の他の土地と同様、ムリワイとマヌカウ湾の間の全ての土地を管理するようになりました。「堅く結ばれた平和」と呼ばれているタウパキは、テ・

ヘンガの北、ティリコファ・パの近くにありますが。この地で、我々の子孫であるテ・アウ・オ・テ・ホエヌアと  
ンガティ・ホットゥアのポウタブアカの間に平和がもたらされました。ポウタブアカが南に旅している時、テ・  
アウ・オ・テ・ホエヌアに呼び止められました。テ・アウ・オ・テ・ホエヌアは、ポウタブアカにどこへ行くの  
か問いかけました。彼は、「キ・ヒ克蘭ギ (オークランドの西部)へ」と答えました。テ・アウ・オ・テ・ホエ  
ヌアはポウタブアカの返事に疑問を持ち、彼に旅を続けさせようとはしませんでした。テ・アウ・オ・テ・ホエ  
ヌアは、石棒を振り、地面に線を引き、ポウタブアカはここから戻らなければならないと言いました。緊張が高  
まりましたが、ポウタブアカが南に向かう力は自分にはもう残っていないと悟ったため、ついに平和が訪れまし  
た。この事件以来、テ・ハウィティはアウ・オ・テ・ホエヌア、つまり「現在の土地」という名前を引き継いだ  
のです。タウパキは、アウカティ、つまり人が通ってはいけない境界線となりました。テ・アウ・オ・テ・ホエ  
ヌアを通じて、テ・カウエラウ・ア・マキは、1860年代の先住民土地裁判での公聴会で、ワイタケレ及び数ブロッ  
クの所有権を主張し、認められたのです。

この国の全ての部族と同様、テ・カウエラウ・ア・マキは、土地を守り、獲得するために戦ってきました。時  
折、部族達は自分のものではない土地をめぐるでも戦いました。以下に示すのは、そのような紛争の一つで、パ  
ウルオアの周りのワイタケレ・レンジにあるテ・カウエラウの地で、ンガティ・ホットゥアと ワイオファの間  
で起こったものです。しかしながら、テ・カウエラウ・ア・マキは両方の部族と非常に親密な関係にあったため、  
彼らは戦争を起こさず、ンガティ・ホットゥアが勝利しました。どちらの指導者もこの地域でマナ（霊的威光）  
を持っていなかったため、この争いの結果は、テ・カウエラウ・ア・マキには関係なかったのです。

1820年代の半ば、マスケット銃で武装したンガプヒ襲撃隊が多くの人を殺害したとき、タマキ・マカウラウ内  
のワイタケレやそのほかの地域では、多くの住民が災難を受けました。テ・カウエラウ・ア・マキは、テヘンガ  
とカレカレにおいて、ンガプヒと戦いましたが、彼らのマスケット銃の威力にはかなわず、打ち滅ぼされてしま  
いました。この惨劇により、部族の数は減少し、1835年までワイカトにおいて、流浪の日々をおくることになっ  
たのです。

1830年代半ば、タイヌイ首長であるテ・ホエロホエロは、タマキ地域に平和をもたらすため、アホイトゥで地  
歩を固めました。彼の保護のもと、テ・カウエラウ・ア・マキは、マヌカウ岸沿いのカカマトゥアに戻ってきま  
した。ンガティ・ホットゥアの準部族であるテ・タオウとンガオホは、プボンガポイントにあるカラंगाハベ・  
パで足場を固めました。この土地は、テ・カウエラウ・ア・マキの首長であるテ・ワアタラウイヒによって、  
ンガティ・ホットゥアに与えられました。テ・カウエラウ・ア・マキは、西オークランド全土とワイテマタ湾の  
他の地域において、要塞化した居留地と村落を再び統治し、1900年代の半ばまで、テヘンガの近くのワイティ国  
の支配を続けました。

今日にいたるまで、テ・カウエラウ・ア・マキは、我が部族の領土内において、管理者として、つぎることの  
ない責務を担い続けています。そして、伝統的知恵あるいは現代的知恵を分かち合うことを目的とした集まりを  
持ち続けています。そうすることで、我々の歴史と伝統は、次世代に受け継がれていくことでしょう。

#### 4. 1991年の資源管理法(RMA)

資源管理法(RMA)の目的の一つは、「自然資源と物理的資源の持続可能な管理」<sup>3</sup>の促進です。この法律は、地  
元民と環境との特別な関係を認め、規定しています。以下に示す資源管理法第二部「RMAの目的と行動指針」  
からの抜粋は、特にこれと関連の深いものです。

第5条(2):

(2)この法令において、「持続可能な管理」とは、自然資源が、あるやり方あるいは速度で、利用、開発、保護さ  
れることを意味している。そのやり方や速度は、人々に社会、経済的、文化的福利や健康、安全をもたらすもの  
でなければならない…。

第6条(e):

6.国民的重要事項—この法令の目的を達成するにあたって、自然資源や物理的資源の利用、開発、保護に関して、

この法令下で、その機能や効力を行使している人々は、全て、以下に示す国民的重要事項を認識し、考慮しなければならない。

e. マオリの人々やマオリ文化との関係、そして、祖先から受け継いだ土地、水、遺跡、墓地、そのほかの所有物との関係

第7条(a),(e):

7.そのほかの事項—この法令の目的を達成するにあたって、自然資源や物理的資源の利用、開発、保護に関して、この法令下で、その機能や効力を行使している人々は、全て、以下のことに特に注意しなければならない

a.保護…

e.歴史的価値のある地点、建築物、場所、地域の認識とその保護

第8条:

8.ワイタング条約—この法令の目的を成し遂げるにあたって、自然資源や物理的資源の利用、開発、保護に関して、この法令下で、その機能や効力を行使している人々は、全て、「ワイタング条約」の原則を考慮しなければならない。

上に示した資源管理法の抜粋とワイタング条約の原則によれば、「承認機関」は、いずれの開発においても、地元民が「影響を受ける団体」とみなされるべきかどうかを判断せねばなりません。各「承認機関」は、その地域と地元民の関係を評価するため、独自の手続きを持っています。テ・カウエラウ・ア・マキは、我が部族に関係したこの手続きを、オークランド地域の多数の「承認機関」に、通知しました。このガイドブックは、テ・カウエラウ・ア・マキが影響を受ける可能性がある団体がどうかを判定するための指針を示しています。しかしながら、地元民の利益が、その地域や地区、市のためになっているかどうかを判定するための特別な手続きについては、適当な「承認機関」に問い合わせたいのです。この指針には、あなたが携わっている開発によって、テ・カウエラウ・ア・マキが影響を受ける団体として認定されるべきかどうかの事前協議のステップについても、概略が述べられています。繰り返しますが、これらの指針は特に、「資源利用承認手続き」との関連において、テ・カウエラウ・ア・マキにしたがってなされる事前協議の最良の方法を提示するものです。個別の事項については、さらに修正や強化がありえます。

## 5. テ・カウエラウ・ア・マキと事前協議する時期

以下に示す質問は、あなたが携わっている開発によって、テ・カウエラウ・ア・マキが影響を受ける団体かどうかを明らかにするための指針として活用することができます。しかしながら、我が部族にとって重要な状況を、すべて網羅しているわけではありません。また、これをもって直接的対話の代わりにしてはなりません。

**Q1.あなたの開発は、テ・カウエラウ・ア・マキの部族境界内でなされていますか、また、テ・カウエラウ・ア・マキ領内の環境に影響を与えますか。**

あなたはこれを以下の方法でチェックできます。

- このガイドの地図(後出)を参照する。そして、
- 関連する承認機関に連絡をする。そして、
- テ・カウエラウ・ア・マキに連絡をする。

もし、あなたの開発が、これらの境界内で実施されるか、境界内の環境に影響を与えるならば、あなたの開発によって、テ・カウエラウ・ア・マキが影響を受けるかどうかを、さらにチェックすることが望ましい。以下の質問事項は、これをするために、どのようなステップをとったらよいかの指針を提供します。それらは、あなたの開発が、部族境界内で行われている、あるいは、影響を及ぼすという場合の質問です。

**Q2.あなたの開発は、テ・カウエラウ・ア・マキによって指定された文化遺跡区域の中でおこなわれますか、あるいは区域内の環境に影響を与えますか。**

テ・カウエラウ・ア・マキは、私たちが重要な権利を持っている特別な地域を指定しています。資源管理法



(RMA)は、このような地域、例えば「祖先から受け継いだ土地、水、遺跡、墓地、そのほかの所有物」と私たちとの関係について規定しています。我が部族の境界内では、私たちが管理者として行動せねばならないという我々の責任もまた、資源管理法は規定しています。私たちが特別な関係を持ち、責任を負うこのような地域は、以下によって識別できます。

- あなたの開発の周辺で、考古学的に重要な場所がないかどうかを「史跡トラスト」に問い合わせる。そして、
- 関連する承認機関に連絡する。そして、
- 「オークランド地域協議会」に連絡し、「文化遺跡一覧(現在開発中)」を照会する。そして、
- テ・カウエラウ・ア・マキに連絡する。もしあなたの開発が、上記の手順のいずれかにおいて、文化的遺跡区内で行われているとされた場合、あなたの計画の性格や範囲について、テ・カウエラウ・ア・マキに連絡し、協議して欲しい。

### Q3.あなたの申請書は通知されているか、あるいは通知されそうかどうか。

あなたの計画がこのような性格のものであれば、環境への影響はかなりのものであると考えられます。テ・カウエラウ・ア・マキの部族境界内にあなたの計画がある場合には、あなたの申請に関連する「承認機関」によって、私たちに通知される可能性が高いです。おそらくあなたは、関連する「承認機関」に問い合わせるか、私たちに直接問い合わせるかして、私たちが通知を受けたかどうか確かめたいでしょう。あなたの申請書か計画書を評価した後、テ・カウエラウ・ア・マキは、私たちが影響を受ける団体かどうかを決定します。私たちが影響を受ける団体として権利を主張した場合、テ・カウエラウ・ア・マキは、私たちと事前協議するよう、あなたに要求するでしょう。

### Q4.あなたの申請は、環境に著しい影響を与えそうですか。

「地域機関」や申請者の意見が、私たちと異なることはありえますが、テ・カウエラウ・ア・マキは、私たちが「著しい環境影響」とは何かを決める権利もっています。資源管理法のもとでは、大地の民と物理的自然資源との関係は、環境の一部と考えるのです。「環境」という言葉は、次の語句を含むとみなすことができます。

#### 「人々とコミュニティを含んだエコシステムとその構成要素」

テ・カウエラウ・ア・マキは、我が部族の領地を先祖代々監督し、責任をおってきました。その責任とは、ある意味では次のようなものです……人間が環境と相互作用する場合にはいずれも、持続可能な方法で運営せねばならない。このような監督権の行使に対する私たちの能力に著しい影響がある場合、テ・カウエラウ・ア・マキは、あなたの計画に関連して、事前協議を要求するでしょう。

#### 「自然及び物理的資源の全て」

保護下にある土地、水、墓地やその他、我が部族の領地内の所有物について、物理的自然資源がもつマナ（霊的威光）を守る責任が、テ・カウエラウ・ア・マキにはあります。この威光とは、全存在あるいはエコシステムを自律的に持続させ、生命を維持する潜在力あるいは生命力と考えることができます。あなたの開発が、我が部族領域内の物理的天然資源が有するマナに対し、著しい影響を与えるかどうかについて、テ・カウエラウ・ア・マキは、あなたの計画に関係した事前協議を受けるよう、あなたに求めるでしょう。マナが意味するところのもの、その詳細については、さらに私たちに直接問い合わせをしていただきたい。

#### 「快適さの価値」

テ・カウエラウ・ア・マキは、我が部族領域内での特別な天然資源と、伝統的に関係もっています。それは、釣り場や貝拾い、食用植物、織物用の材料や医療用ハーブの収集場所などです。資源管理法は、特に、船の管理場所、魚場、繊維用植物、地元民に管理された魚場<sup>5</sup>などに言及しています。あなたの開発が、私たちとこれら環境との伝統的関係を維持していくための能力に著しい悪影響を与えるならば、テ・カウエラウ・ア・マキは、開発に関した事前協議を、あなたに求めるでしょう。

#### 「影響を与えたり、これらの事項によって影響を受ける社会的、審美的、文化的状況」<sup>6</sup>

文化的、社会的価値に基づいた我が部族の境界内の地域、例えば、和平の場、部族間の婚姻、古い居住地や聖地ですが、これらとテ・カウエラウ・ア・マキは関係を持っています。あなたの開発が、テ・カウエラウ・ア・

マキの社会的地位や文化的価値を傷つけると予測できる場合、私たちは、計画に関する事前協議をあなたに要求することになります。

テ・カウエラウ・ア・マキは、事前協議を意味あるものになりたいと願っています。そのためには、あなたの計画について、できるだけ早く私たちに連絡していただきたいのです。もし、テ・カウエラウ・ア・マキが、あなたの計画により影響を受ける団体とわかった場合、私たちにすばやく連絡していただければ、あなたのプロジェクトの遅延は最少ですむでしょう。上記に示した段階を踏んでも、テ・カウエラウ・ア・マキがあなたの計画で影響を受けるかどうか分からない場合には、関連する「承認機関」か、テ・カウエラウ・ア・マキに直接問い合わせてください。

### 6. テ・カウエラウ・ア・マキの部族境界と伝承地域の識別

後出の地図は、「資源利用承認」の申請者に対して、オークランド地域でのテ・カウエラウ・ア・マキの大きな勢力関係を示しています。これは、あなたの開発がテ・カウエラウ・ア・マキに影響を与える団体かどうかを識別するために使うことができます。他の識別法も、このガイドブックには示されています。

テ・カウエラウ・ア・マキの広大な部族領地は、この地図にも強調して示してあります。テ・カウエラウ・ア・マキは、この広い地域で、大地の民として、唯一権利を主張しているわけではないことに注意していただきたい。いくつかのケースでは、我々の地域は、他と共有されていたり、小さなものであったり、あるいは存在しないこともあります。部族の領域は、その性格上、非常に複雑なので、我が部族が支配している一般的地域を識別するためのガイドとしてこの地図は利用されます。

この地図は、我々の全支配地域を網羅するようにはなっていません。というのも、いくつかのテ・カウエラウ・ア・マキの土地はとても狭いからです。さらに、この地図を我が部族との事前協議を回避したり、この資料に書かれた以上のステップをとろうとしないことを正当化するために使ってはいけません。テ・カウエラウ・ア・マキは、各案件ごとに、影響をこうむる団体として、利害関係を主張する権利を保有しているのです。

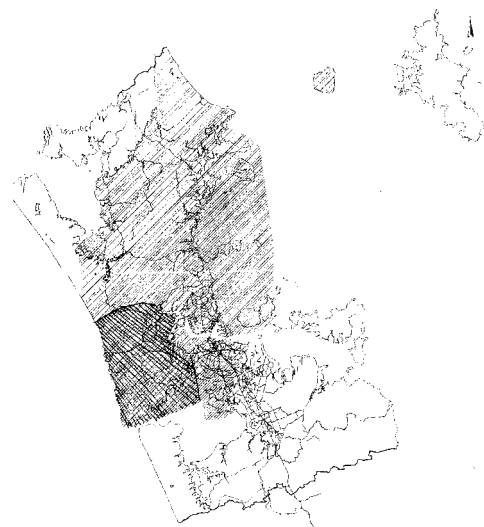
### 聖なる場所

大地の民と聖なる場所との関係は、資源管理法で特に強調されています。聖なる場所は、マオリの人々、あるいは部族や準部族などのマオリグループにとって、聖地であります。ある場所が聖地かどうかを知るには多くの方法があります。以下にその例を示しますが、これがすべてというわけではありません。

- ・重要なイベントが行われた地域
- ・墓地
- ・戦地
- ・要塞
- ・血が流されたすべての場所
- ・マナ（霊的威光）再生のために使用禁止となっている地域
- ・霊的理由のために使用禁止となっている地域
- ・汚染のため使用禁止となっている地域

以下をチェックすることによって、あなたの場所が聖なる地の周辺にあるかどうかを識別することができます。

- ・関連する「承認機関」に問い合わせる。そして、
- ・あなたの開発の周辺で、遺跡や聖なる地がないかどうかを「史跡トラスト」に問い合わせるか、
- ・直接、テ・カウエラウ・ア・マキに問い合わせる



初期の先祖からの領地  
 広がりをもせている先祖からの領地

テ・カウエラウ・ア・マキの部族領域

聖なる地があなたの計画の周辺にあることが分かれば、テ・カウエラウ・ア・マキに連絡してください。開発の性格やその期間にもよりますが、聖なる地に何らかの悪影響を与える場合、テ・カウエラウ・ア・マキは、影響を「回避するか、修復するか、あるいは緩和する」ためのステップを提案します。

### 工事中の遺跡の発見

理想的には、プロジェクトを着手する前に、そこに、あるいは近くに、聖なる地があるかどうかを確かめるのが良いでしょう。しかしながら、実際には、それを常に行うことは無理です。そこで、発掘の最中に、もし考古学的あるいは人類学的遺跡が、あなたの開発のいずれかの段階で出土した場合、テ・カウエラウ・ア・マキはすぐに以下の手続きをとること求めます。

- ただちに作業を中止する
- 影響を受ける団体として認められたテ・カウエラウ・ア・マキと他の部族に直接連絡する。そうすれば、適切な儀式を遂行することができるし、どの遺跡についても適切な方法で処理することができるでしょう。
- 考古学者に連絡し、調査をしてもらう。
- 「史跡トラスト」に連絡しなさい。そうすれば、あなたが作業している場所の周りの地域が考古学的に価値ある場所として記録されます。

テ・カウエラウ・ア・マキには、伝統的に聖なる地を守る責務があります。また、聖地を守るための法廷権を持っています。どんな場合でも、私たちは、あなたのプロジェクトの遅れを最小限にするよう努力します。あなたの工事場所で遺跡が見つかった場合、必ず私たちに連絡していただきたい。私たちは、私たちにとって聖なるもの、そしてそれと関連する場所を守りたいのです。個々のケースごとに、テ・カウエラウ・ア・マキは、適切な行動をとるでしょう。

## 7. テ・カウエラウ・ア・マキとの事前協議の最初の手続き

### 第1段階

#### あなたのプロジェクトの実行可能性の判断

すでに述べたように、テ・カウエラウ・ア・マキとの連絡が早ければ早いほど、私たちとの協議は、より効果的になり、あなたのプロジェクトの遅れも少なくなるでしょう。理想的に言えば、「資源利用承認申請」を提出する前に、テ・カウエラウ・ア・マキがあなたのプロジェクトによって影響を受ける団体であるかどうかを、あなたは見極めなければなりません。テ・カウエラウ・ア・マキの「資源管理官」は、あなたが計画の環境への影響評価をあらかじめ評価しようとするならば、喜んでお手伝いします。

### 第2段階

#### テ・カウエラウ・ア・マキがあなたのプロジェクトにとって影響を受ける団体かどうかの識別

テ・カウエラウ・ア・マキの権利に関係した地域かどうかを、「識別チェックリスト」に示された手順をとって調べてください。また、あなたの計画にとって適切と考えられる他の手順もとって下さい。一般的に、最も容易にテ・カウエラウ・ア・マキの権利を識別するには、電話か郵便で「資源利用承認事務所」に直接連絡し、計画について簡潔に説明するのがよいでしょう。

あなたの計画の性格や範囲にもよりますが、テ・カウエラウ・ア・マキは、影響を受ける団体として、権利を識別し、そして正式に事前協議するよう求めるでしょう。

### 第3段階

#### 適切な情報の提供

テ・カウエラウ・ア・マキと事前協議を始めたあなたのプロジェクトが、今、どの段階にあるかによって、あなたが提供できる情報の範囲は決まってきます。下記に示したリストは、テ・カウエラウ・ア・マキが、あなた

のプロジェクトに対する手続きを進めるのに役立つ情報です。

### 環境への影響の評価 (A E E)

「資源利用承認」の申請には、環境影響の評価が求められています。A E Eのうちの一つとして、申請者は、「あなたの提案が、権利を持ち、あるいはそれによって影響を受ける団体の名前を示す」ことと、「なされている事前協議とその協議の見込み<sup>2</sup>」を示すことが求められています。すでに述べたように、人々、特に大地の民と物理的自然資源との関係は、環境には不可欠のものなのです。影響を受ける団体も、あなたによる環境評価(A E E)によって、識別されなければなりません。テ・カウエラウ・ア・マキが影響を受ける団体として認定されれば、問題となっている物理的自然資源と私たちとの特別な関係も考慮されなければならないでしょう。このような場合、テ・カウエラウ・ア・マキは、あなたが環境評価(A E E)を行うのを喜んでお手伝いしたいと思っています。

### 考古学的、歴史報告書

あなたが申請の手続きをしている「承認機関」は、考古学的、歴史報告書の提出を求めます。その場合、私たちに写しを提供してください。そうすれば、テ・カウエラウ・ア・マキは、あなたの計画の進行を助けることができます。

### プロジェクトの予定表

情報を最も効果的に調整するために、主要な目標を含めたプロジェクトの計画表を提出して下さい。

## 第4段階

### テ・カウエラウ・ア・マキからの最初の返答

あなたからの情報を受理し、手続きした後、私たちの「資源管理官」が返答します。この回答には、通常、以下のことが含まれています。

- テ・カウエラウ・ア・マキがあなたの計画によって影響を受ける団体かどうかの確認
- 必要な場合には、現地視察の要求
- 事前協議において何をなすべきかについてのコメント
- 事前協議にかかる費用の見積もり

## 第5段階

### テ・カウエラウ・ア・マキ「資源管理官」(RMO)による現地視察

あなたが提示してくれた情報を処理検討した後、テ・カウエラウ・ア・マキRMOは、あなたの用地の視察を求めるでしょう。資源管理官は、たいてい、当該計画をよく知っている人に、その土地の周りを案内してもらいます。それ以後の視察は、あなたのプロジェクトの全工程を通して行われるでしょう。

## 第6段階

### テ・カウエラウ・ア・マキRMOによるあなたの計画の評価

適切な情報を全て処理検討してから、RMOは、テ・カウエラウ・ア・マキの権利に関連する影響度を評価します。評価の基本的基準は、この資料の中に示してあります。あなたの計画の性格と範囲によっては、RMOは、部族の意思決定機関であるテ・カウエラウ・ア・マキ・トラストに事前協議を委任するでしょう。

## 第7段階

### テ・カウエラウ・ア・マキによる勧告

適切などころで、RMOは、申請者と関連する「管理局」に対して、テ・カウエラウ・ア・マキと環境との関係の観点から、「回避するか、修復するか、緩和する」<sup>3</sup>ためのステップを勧告するでしょう。



## 第8段階

### 必要に応じて求められる情報

テ・カウエラウ・ア・マキがあなたの計画の進展を監視、あるいは評価する場合、計画ごとに、さらに必要となる情報について、申請者と話し合うことになるでしょう。

## 第9段階

### 計画の支持、あるいは反対の具申

あなたの計画の是認は、一般的にテ・カウエラウ・ア・マキからの申請者への手紙という方法で行われます。テ・カウエラウ・ア・マキがあなたの計画に何らかの理由で反対した場合、正式な具申が、関係する承認機関と環境裁判所に提出されます。

## 第10段階

### 「承認機関」による計画と具申の処理

RMAのもとで、資源の持続可能な管理を促進する責任全体に関して、テ・カウエラウ・ア・マキによってなされた計画に対する是認、あるいは反対の具申を、あなたの認証申請を審査している承認機関は考慮するでしょう。あなたの資源利用申請を承認する条件として、テ・カウエラウ・ア・マキによってなされたいくつか、あるいは全ての勧告を「承認機関」は選び、組み込むでしょう。テ・カウエラウ・ア・マキは、RMAに書かれた正式な手続きにより、「承認機関」によってなされた決定や勧告を不服として上訴する権利を有しています。

## 8. テ・カウエラウ・ア・マキ・トラスト

テ・カウエラウ・ア・マキ・トラストは、テ・カウエラウ・ア・マキ部族の代表として委任された機関であり、意思決定機関です。テ・カウエラウ・ア・マキは、長い間、部族協議会(ルナンガ)を維持して来ました。その一つの例を文献にみることができます。タウパキ区が、先住民土地裁判で調査対象となったときに、テ・カウエラウ・ア・マキは部族協議会を持っていたと記されているのです。1910年頃、アリキ部族のテウティカの死後、協議会は下火になりました。これ以後、テ・カウエラウ・ア・マキは、部族の委員会を作り、部族の諸問題について議論してきました。この委員会は、テ・カウエラウ・ア・マキ・トラストの設立まで何世代も続きました。現在のトラストは、1933年に設立され、非営利団体として登録されました。現在、トラストは、以下のことがらを責任をもって行っています。我が部族の共同資源の管理、管理者としての我々の役割の確保、我が部族と承認機関など関係機関との関係の管理、教育、雇用、健康、住宅サービスの提供。しかしながら、テ・カウエラウ・ア・マキ・トラストが、現在、そして未来にわたってテ・カウエラウ・ア・マキの子孫に福利を提供し、そして、私たちのやり方を守っていく道を探り続けること。これが最も重要な責務なのです。

## 料金体系

私たちのサービスを受けるには、費用がかかります。その金額は、開発プロジェクトについての予備会議で話し合われます。計画と事前協議に関するサービス料金は、以下のことから算定されます。

- 資源管理官とトラストの時間
- 運営
- 旅費
- 電話

調査や協議が必要となり、さらに負担がかかる場合、事前に申請者に知らされます。料金には消費税は含まれていません。

## 9. むすび

テ・カウエラウ・ア・マキとの事前協議について、この資料は、いくつかの点で方向を示すことができると思

います。私たちは、物理的自然資源への影響が懸念される活動を行う個人やグループとの間で、前向きで有意義な実務関係を作っていきたいと心から願っています。それによって、持続可能な資源管理の目的が達成され、そして、全ての人々が環境との関係を強固なものにしていだけたらと願っています。

#### 参考

1. John White, Turtons Land Deeds of The North Is.,1883
2. Waitakere City Council, Proposed District Plan, Tangata Whenua Section
3. Resource Management Act 1991, Section 5
4. Resource Management Act 1991, s6(e)
5. Resource Management Act 1991, s58(b): s61(2)(a)(ii),(iii)
6. Ministry for the Environment, A Guide to Preparing a Basic AEE,p.14
7. Ministry for the Environment, A Guide to Preparing a Basic AEE,p.15
8. Resource Management Act 1991, Section5
9. Te Warena Taua, Traditional Evidence, WAI470